

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

## 真鶴の小さな家 : 坂のある港町に住む

永野, 尚吾 / NAGANO, Syougo

---

(発行年 / Year)

2008-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2008-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

P377.5  
M35-2  
2007-36



2007年度 修士設計

真鶴の小さな家 一坂のある港町に住む

主査： 富永 讓教授  
副査： 陣内 秀信教授  
副査： 佐々木睦朗教授

法政大学大学院工学研究科建設工学専攻富永讓研究室  
06R5335 永野 尚吾

Small House at Manazuru

This project is a plan of a "small house". It is a plan of a "small" house and a small "house". Then it is built at "Manazuru".

Planning a house—in the most basic meaning—is planning "comfortable spaces" for the people. In this project, "small" means that a house is talked about a human scale. Then a "small house" is built at a peculiar "place" named Manazuru.

At this point, let's suppose two words "comfortable spaces" and "a place" as follows;

1. "Comfortable spaces" stand for an essence of a place that we can feel comfortable when we stay there: a "form" of space.

But individual images of "comfortable spaces" are fragments thoroughly, so although we put these images at random, we cannot design a comfortable house; on the contrary it is no more than a mixture of parts. Individual "comfortable spaces" must be composed suitably.

2. "A place" gives a definite "shape" for an "gathering of rooms" as a form.

"A shape" doesn't mean "a molding". Composition of rooms is changed variously by all kinds of Circumstances: Individual information a place has, for example, an approach for a site, ups and downs of the earth, various views, the flow of the wind, and more.

The former is to imagine the "room" Louis I Kahn says, the latter is to root on the earth.

Moreover, we assume following;

3. To design a building is meeting of "comfortable spaces" and "a place".

If that is the case, a plan of building is a response to the site, a small house at a small port town Manazuru will have a different shape against a house of city.

However, the most interesting thing is that wherever a house is built, the basic image of spaces we feel comfortable doesn't change at all.

For instance, when we think about a view, there are all types of windows. However the most important thing isn't a difference of a view but a wish to see wonderful scenery.

As a result, there are many kinds of window. Exactly it is a response to the site.

Chapter 1. Twelve fragments of "comfortable space"

Express about definite images of "comfortable space". These are my opinions and bases of thought to design.

1. An introduction
2. A small garden at an entrance porch
3. Near the window
4. A bay window
5. A verandah
6. The shade of a tree in the garden
7. Around a fire: A kitchen, a dining table and a hearth
8. A bathroom
9. A roof terrace
10. A bedroom
11. A tree and a small house
12. A conclusion

Chapter 2. Notes about "a place"

It is an analysis of town's structure of Manazuru: a small town which has slopes.

Chapter 3. Project—meeting of "comfortable space" and "a place"

Try to verify by definite design how individual images of "comfortable spaces" are composed and appear within a landscape of Manazuru.

In this phase there are two matters are bases of thought: "a house is a meeting of comfortable spaces" and "a house exists within a landscape".

## 真鶴の小さな家

「小さな家」の計画である。それは「小さな」家の計画であり、小さな「家」の計画である。そして同時に「真鶴」に立つ小さな家の計画である。

「家」を計画するということは、最も基本的な意味において、人間の「居場所」を計画することである。「小さい」ということは、ここでは家が人びとに寄り添うような人間の尺度で語られることを意味する。そして、その「小さな家」は、「真鶴」という固有の「場所」に立つ。

ここで、「居場所」と「場所」という言葉について次のように仮定しよう。

1. 「居場所」とは、人が居心地よいと感じることのできる空間に関する普遍的な場のエッセンスである。つまり空間の「型」である。

ただし、個々の居場所のイメージは、あくまで断片であり、それらがでたらめに配置されただけでは居心地のよい家を生み出すことはできない。それどころか、単なる部分の寄せ集めでしかない。個々の「居場所」は適切に構成されなければならない。つまりそれは家の「型」をつくることである。

2. 「場所」は、型としての「居場所の集合体」に具体的な「形」を与える。

ここでいう「形」とは造形のことではない。「場所」の持つ固有の情報、たとえば敷地へのアプローチ、大地の起伏、その土地に立ったときのさまざまな眺望、風の流れ、といった諸々の状況によって、「居場所」の構成、つまり家の「型」は多様に変化する。これが「居場所」が「場所」によって「形」を与えられるということの意味である。

前者は、ルイス・カーンの言う「ルーム」を思い描くことであり、後者は「ルーム」が大地に根を下ろすことである。

そしてさらに、

3. 建物を計画することは、「居場所」と「場所」が会うことである。

と仮定するならば、建物の計画は敷地への応答であり、「真鶴」という小さな港町に立つ家は、高密度な都市に建つ家とはおのずと異なる「形」をとることになる。

しかし興味深いのは、たとえどのような「場所」に立つ家であっても、人びとが居心地よく感じられるような空間のつくられかたそのものの基本的なイメージは、決して変わることがないということである。

たとえば、眺望について考えてみると、大海原に向けていっぱい開いた大きな窓があれば、都市住宅の小さな坪庭に開かれた小さな窓もある。重要なのは見る対象の差異ではない。守られた家の中から外の風景を見たい、よい風景を見たい、よい風景が周りになれば自分で作ってでも見たいという心の奥底からの切実な願いである。その結果として生じる開口部の作り方の差異こそが、「場所」に対する固有の応答なのである。

## 第1章 居場所をめぐる12の断章

ここでは、個々のさまざまな「居場所」の具体的なイメージについて、事例をまじえながら列記してみようと思う。それは「こういう空間を作りたい」という夢の断片である。序論・結論を含み、以下の具体的な「居場所」のイメージについて述べる。これらは客観的な分析を心がけたものから夢想的なものまでさまざまであるが、住まいを設計する上での私の考え方の根底にある思いである。

1. 序論 場所と居場所について
2. 玄関先の小さな庭
3. 窓辺
4. ベイ・ウィンドウ
5. 縁側
6. 庭の木陰
7. 火を囲む場所—キッチン・食堂・そして炉辺
8. バスルーム
9. 屋上テラス
10. 寝室
11. 一本の樹と小さな家
12. 結論 住まいにおける普遍的なもの

## 第2章 場所に関するノート

「真鶴」という具体的な土地の特徴について、町の持つ雰囲気や町の構造、魅力的な空間についての覚え書きである。傾斜地特有の町の構造について分析する。

## 第3章 計画—「居場所」と「場所」が会うこと

個々の「居場所」が敷地の環境や町の構造を参照しながら、どのように構成され、風景の中に具体的な姿をもって現れるのかを具体的な計画を通して検証する。ここでは2つのことが考えの基本となっている。すなわち「住まいとは居場所の集合体である」ということと「住まいは風景の中に存在する」ということである。このことの具体的な図面による表現を試みる。

論文概要	1
目次	3
第1章 居場所をめぐる12の断章	
1. 序論 場所と居場所について	5
2. 玄関先の小さな庭	7
3. 窓辺	8
4. ベイ・ウィンドウ	9
5. 縁側	10
6. 庭の木陰	11
7. 火を囲む場所—キッチン・食堂・そして炉辺	12
8. バスルーム	13
9. 屋上テラス	14
10. 寝室	15
11. 一本の樹と小さな家	16
12. 結論 住まいにおける普遍的なもの	17
第2章 場所に関するノート	
1. 真鶴町の概要	19
2. 坂の町	20
3. 小さな風景	21
4. 貴船祭り	22
第3章 計画—「居場所」と「場所」が会うこと	
1. 建築概要	24
2. 風景の中に在ること	27
3. 「居場所」の集合としての住まい	32
4. さまざまな暮らしの場面	39
謝辞	51



第1章

居場所をめぐる12の断章



居酒屋もまた町の中の「居場所」である

人間は住むという長年の営為をとおして、自分を取り巻く環境をよきものに整え、そこに記憶を刻みつけていきながら、広大な世界の中に住宅を根拠に自分の姿を建設しようとしているのかもしれない。自らの巣を、動物としての直覚が見分けるように、住み手は自らの住まいの環境を時間をかけながら隅々まで知り、個性化し防護と安らぎの場につくり上げていく。

富永 謙

人間にとって住まいとはなんだろうか。  
それはもつとも単純であるがゆえに、もつとも難しい問いであるといえる。

それでは、自分にとって住まいとはなんだろうか。  
時の移ろい。流れる雲。にわか雨。落雷。遠くの空にかかる虹。雨のしずく。鳥のさえずり。庭の花に集まる蜜蜂。夕焼け。裏の町工場の機械の音。夕げの仕度のおい。幼い子供の弾くピアノの音。けんかする声。たまに聞こえる石焼いもの声やラーメン屋台のチャルメラ。灯油を売りにくるトラックのもの哀しい音楽。夕立ち。犬の遠吠え。家々の明かり……  
窓を開けて、そうした何気ない出来事に心を動かされる。  
そのような瞬間が、私は好きだ。

住まいにとつてもつとも基本的なことは、日々の忙しい生活の中で、ふっと肩の力を抜くことのできる居場所をつくること、あるいは自分がそこにいることが正しいことだと思えるような、安心感を与えてくれる空間をつくることだと思う。

自分の帰る巣があるということ。

それは人間の中にあるはずの動物としての本能的な欲求であり、そのことが人間の精神の健康にとって、もつとも重要なことである。フォレスト・ウィルソンは「構造と空間の感覚」のなかで次のように言っている。

人は空間を限定せねばならない。彼は出発点にもどることができるようでなければならない。もし彼がそのような地点にもどることができないのであれば、このことは社会的および人間的行動の本質的条件であるから、彼は生きていくことができない。したがってこれは、空間を組織づける第一の条件である。

それは決して特別なことではない。むしろ、ごく当たり前の、平凡きわまりないことである。だが、それがあまりに平凡すぎるためにもすると忘れてしまいがちなことなのだろう。こんなきわめて当たり前なことを見失ってしまい、経済合理主義の論理によってつくられた建物が、現代の都市にあまりに多いことは、不幸な事実である。

入り口がどこか容易にはわからず、雨の日に雨宿りのできる庇もなく、外気からは遮断され、空調と人工照明に満ちた、均質で無菌質な、人間をぎりぎりとして圧迫するような建物が次々と建てられてゆく現在の状況は、人間にとってひとつの重大な危機であろう。

現実に、土地に根ざした建物は老朽化を理由に次々と取り壊され、いづこも同じ分譲マンションに取って代わる。大型百貨店が駅前に進出し、商店街は活気を失う。どこへいっても同じ味のするファミリーレストランに慣れすぎてしまい、その土地の味を守る店は次第に姿を消す。その結果、どここの町を歩いても同じような景観を見ることになる。町は個性を失いつつある。「自分の町」に帰ってきたという感覚や「知らない町に来た」という感覚は薄れてゆく。人びとは歩きながら携帯電話をいじる。そこにあるのは身近な風景への無関心ではないか。

しかし、そのことを嘆いているだけでは何の解決にもならない。そのような事態から抜け出すには、われわれ自身が、魅力的な場所、居心地の良い場所を見出し、日々の生活の中にそうした空間を取り入れてゆくよりほかに方法はないのではないだろうか。

人間は四六時中、建築と接して生活している。道も、木立も、車も、電車も、人が歩き、時には食事もし、座ってとどまるという点できわめて建築的な空間であるといえよう。

そのような人間の「居場所」を、もつとも身近に、もつとも親しいものとして感じる場所が住宅であり、その意味において住宅はもつとも基本的な建築の空間であるということができる。建築の空間は人間によって使われるものである以上、それがどんなに大規模な公共建築であったとしても、その空間の基本は住まいであるといえる。

たとえば、図書館は人々の集う学びの場であり、買い物や散歩の途中などに気軽に立ち寄れる居間のような場所でもあり、軽い食事に立ち寄れるような場所でもある。それは当然、本を収蔵する書庫であるというだけでは不十分である。

美術館は芸術作品について語り合うことのできるサロンでもあり、展示を見るという目的のない人でも屋外の彫刻を眺めたり、木陰のベンチで涼んだり昼食をとったりできる場所でもある。それはただお金を払って美術作品を見るだけの場所というだけでは不十分である。

市役所や病院なども、ただ用事を済ませて帰るだけの空間ではない。そこはお年寄りたちが気軽に集まっておしゃべりのできる場所であり、母親たちが身近な出来事や互いの子供の成長について話すことのできる場所である。そういうことのできる場所はとても生き生きとしている。

それがいかなる施設であれ、人間によって使われる限り、人間の居場所としての住まいの遺伝子を、その中に持っているということができる。



庭の一角



商店街 陽の当たるベンチで休む人



熊本県立美術館 前川國男設計  
窓辺や壁際に人びとが休息している

では、そのような魅力的な空間は、どのようにして生まれるのだろうか。  
そのことを考えるために、以下の章では、住まいにおいて、人間の「居場所」としての空間の特徴的なものをいくつかとりあげ、ひとつひとつ検証していきたい。

そこでまずは、「場所」と「居場所」という言葉の定義を明確にしておく必要がある。

「場所」という言葉は、たとえば「場所性」という言葉が示すように、ある固有の、特定の場を示す言葉であるということができる。たとえば、「東京駅」はひとつの特定の場所である。「東京駅の中にある〇〇という名のレストラン」もひとつの特定の場所である。「私の家」も「あなたの家」も、ひとつの特定の場所である。

一方で、「居場所」と言う言葉の意味するものは、人間が留まるという行為に関してみれば、ある普遍性・一般性をもった場であるといえることができる。

たとえば「光の射す窓辺」はどこかの家にしかない特定の場所ではなく、どこかの家にでも存在する普遍的な場のエッセンスである。「居間」という言葉の示すものも、ある特定の場所ではなく、ある部屋の持つ一般的な性格を記述した言葉であるといえる。

では具体的に、「居場所」と呼ぶことのできるものにはどんなものがあるのだろうか。  
それを知るには、正確に言えばそれを思い出すには、自分にとって「居心地のいい場所」あるいは「居心地のよさそうな場所」、さらには「あこがれを感じる場所」を思い浮かべてみる必要がある。

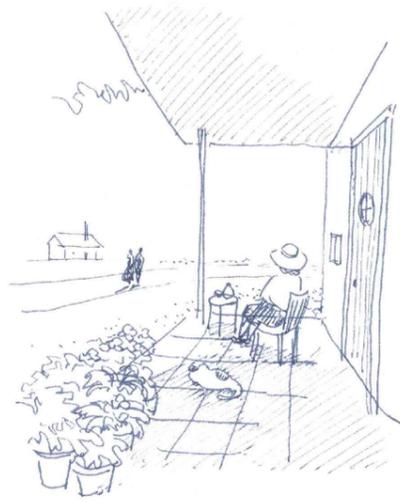
まずは自分の身の回りから。自分の部屋や家や庭のまわりなどで。  
一本の大樹の下。庭を見渡せる窓辺に置かれた古い木の座椅子。小さな椅子の置かれた玄関ポーチ、本棚に囲まれた自分の作業机。湯船。ストーブのまわり。こたつ。縁側。腰掛けられる階段。洗濯物の干してあるベランダ。庭の片すみの小さな木陰。勝手口のあるキッチン。空の見える食堂。窓際のベッド……

つぎに散歩や買い物など、自分の住む町の中で。  
並木道。小川の流れる小路。町を見渡せる小高い丘。坂道。川辺の散歩道。藤棚。池のまわり。公園のはずれの四阿(あずまや)。猫が昼寝をしているブロック塀。アーケードのある商店街。店先のベンチ。パラソル付きの丸テーブル……

さらに遠出をしたときに。  
鈍行列車の、窓をはさんで向かい合った座席。喫茶店の隅の壁際の長椅子。寝台列車の座席兼ベッド。小さな囲いのついた田舎のバス停のベンチ。ストーブの置かれた小さな駅の待合室。旅館の階段の踊り場に置かれた一对の安楽椅子。港の突端。高台のレストラン。海が見えるラーメン屋。たまたま通りかかった家の玄関先の小さな庭……

イメージする具体的な「場所」は人それぞれ異なるが、そこにはある共通点が見出される。それは、座るということ。立ち止まってしほの間たずむということ。思わずゆっくり歩きたくなる場所であること。などである。

それはたとえ歩いているにせよ座っているにせよ、多かれ少なかれその場所に「留まる」という行為と関係している。以下の章では、そうした「居場所」のエッセンスを持つ場のイメージを、紙の上に定着させる作業を試みてみたい。



玄関先の小さな庭

街路とのもっとも公的な係わり合いは、家の外に座ることである。多くの人びと、それも特に老人たちは、自宅の玄関前に椅子を持ち出し、家の壁にもたれて、何か手仕事をしたり、ただ街路の様子を眺めて楽しむのである。ただし、あまりに公的すぎるのには多少抵抗があり、たとえ公的な世界にいても明らかに私物と分かるベンチや腰掛が必要になるのである。

クリストファー・アレグザンダー「パタン・ランゲージ」



真鶴 おばあさんの家の玄関先

坂道に少し埋まった、ちいさな玄関先の庭。使い込まれた木製の縁台に、たくさんの植木たち。道行く人と挨拶をしたり、ちょっと座って話したり。ひとりで暮らしていても、みんなが声をかけてくれる。



赤羽台団地、エントランスの前庭

住人が自分たちの手で草花を育て、思い思いに植木鉢を置いたり、手入れをしている。



1 マカオの店先 2 マカオ、住宅 3 東京、私の家 4 真鶴の床屋 5 真鶴、猫が寝ている玄関先 6 真鶴、おばあさんの玄関先

玄関先は家と町との接点であり、人びとの出会いの場所である。

通りすがりの人との何気ない立ち話や、ちょっと腰掛けてお茶を飲んだり。そういう時間は、自分はひとりではないということを感じさせてくれる。このことは町に住むことを考える上できわめて重要なことである。

玄関先はいわば家の顔であり、玄関先に植木鉢を並べるだけで、そこに住む人の個性があらわれる。人の住んでいる気配を伝えることはもちろん、そこにどんな人が住んでいるのかもよくわかる。いろいろな玄関先を観察しながら町を歩くのもまた、とてもおもしろい。

整然と並ぶ植木鉢の列、あるいはふぞろいな植木鉢たち。  
にぎやかな色とりどりの花たち、あるいは白一色のマーガレット。  
トマトや夏みかんなど、実のなるものが好きな人もいる。

自分の手で居心地のよい場所をしつらえると、そこはその人にとってかけがえのない、固有の場所になる。晴れた日には、家事や仕事の合間に玄関先に椅子を出して、蜜を集めにやってくる蜜蜂や蝶々をながめたり、通りを行きかう人びとをながめたりできる。

品川などに残る下町を歩いていると、歩道にはみ出すほど、あふれんばかりにたくさんの植木鉢を置いている家をよく見かける。それは植木を置く庭をとることができない高密度な都市環境という状況を反映しているためといえるが、言ってしまうと道路の一部を不法占拠してまで植木鉢を置くということは、それがいかにその人の生活にとって重要なことであるのかを端的に物語っている。

高密度な都市環境であればあるほど、たとえわずかでもいいから自分の庭のような領域を持ちたいという欲求は強くなる。

家々の正面に一見無造作に並べられた植木鉢は、通りに人間の気配と緑の豊かな風景をかたちづくる。そういう道を歩いていると、たのしい。

そのような空間は、たとえば公園の建てた団地のように、一見画一的に見える建物にも見られる。

赤羽台団地の通路には、たんなる動線としてではなく、建物の足元のところに花壇を設け、さまざまな草花が植えられて、通り庭のようになっている場所がある。そして、エントランスホールへと上がる数段の階段には、誰が育てているのか、植木鉢が並べられているところもある。

花壇などは建設当初からあったものだろうが、そこに植えられた多種多様な草花や木々、無造作に置かれたバケツや如雨露などは、ひとつの風景と呼びうる空間を生み出している。それは計画されたものではなく、そこに住む人々の手によって、長い年月をかけて培われた場所である。

住人が自発的に、自分たちの玄関先を豊かなものにしようと、花壇に花を植え、植木鉢を置いて階段を飾り、水を撒き、手入れをしている。身近な土があることで、公共の場所に、ささやかながら自分たちのコーナーをつくることができる。

特に集合住宅を計画するとき、このような、住まい手自らが積極的に手を加える余地を残しておくことが、たいへん重要であるように思う。そうすれば、たとえ画一的な団地のような建物であっても、各コーナーごとにアイデンティティーが生まれ、日々をその場所で過ごす楽しみがひとつ加わることになるのである。

午後のうららかな日差しの中でその風景に出会ったとき、私はそのはつとするような美しさに心を打たれた。そこには人びとの暮らしがあった。前川國男のいう「無償の美しさ」ともいうべき姿が、そこにはあった。

40年という時の中でゆっくりと育ててきたその場所は、建て替えのため近い将来取り壊されるさだめにあるのだが、なぜこのような空間を残すことができないのだろうか。あるいはなぜ、新しい計画の中に生かすことができないのだろうか。

たとえほんのわずかでも、ある面積の土があれば、このようなことは容易にできるはずである。





ある家のエレメントについて考えてみましょう。たとえば居間にベイ・ウィンドウが設けられたとしましょう。しかられた少年はそこに座り、ひとり離れたところにいると感じ取ったり、あるいは自分のルームにいると感じ取ることができます。

ルイス・カーン



フィッシャー邸(設計、ルイス・カーン)

居間の一角に造りつけられたベイ・ウィンドウ。ちょうど2人で腰掛けるのによい大きさで、室内に向いて設けられている点が特徴的である。夫婦がここに座って室内の力強い暖炉を眺めている光景が想像できる。



京都会館の中庭(設計、前川國男)

都市の中の居場所。道路からピロティを通してクランクしたところに、建物によってL字型に囲われた中庭がある。中庭は隣接する公園に対して開かれ、そこに居ると大きな空間の一角に佇んでいるような感覚がある。

ベイ・ウィンドウ（張り出し窓）は出窓の一種だが、床面から立ち上がっている点が特徴である。

それは床面と同じレベルか、あるいは一段上がったレベルに、歩いて入ることのできる小さなコーナーを生み出す装置である。あるいは一段下げてみてもおもしろい空間になるかもしれない。

通常の出窓は「棚」や「机」としても機能できるが、ベイ・ウィンドウの場合、「床」として機能するため、椅子や長椅子を置いて小さなコーナーをつくり、そこに座って外の景色を眺めたり、うらかな日差しの下で編み物や読書を楽しむこともできる。囲み感のある室内の一角から外部とのつながりを感じられる魅力的な場所である。

そのため、そこから見える眺望がよいことが重要である。

それは必ずしもりっぱな風景である必要はないが、日当たりがよく、庭あるいは通りに面していて、庭木や街路樹、あるいは外を通る人の動きが見えるところに設けられることが大切である。

自分は守られたコーナーに居ながら、どこかで外の世界とつながっているということは、私たちに安心感と満足感を与えてくれる。

ベイ・ウィンドウの魅力のひとつは、そのほどよいスケール感、言い換えれば身体性にあると思われる。自分の手の届く範囲、畳一枚分程度のくぼみの中に、自分の身体がずっと納まる感覚。それはまるでポケットのように気がきいていて、かわいらしい空間である。

居間の一角にこのような場所があると、そこは豊かな、固有の居場所になりうる。居間という、家族が集まる場所の一角にあつて、居間と連続していながら緩やかに独自性を持った場所をつくることのできる。そこはより個人的な空間、あるいは二人の人間が話をするような親密な空間になる。それはガストン・バシュアールの言う「片隅」の空間である。彼は次のように言っている。

家のすべての片隅、部屋のすべての角、われわれが身をひそめ、からだをちぢめていたいとねがう一切の奥まった片隅の空間は、想像力にとっては一つの孤独であり、すなわち部屋の胚種、家の胚種である。

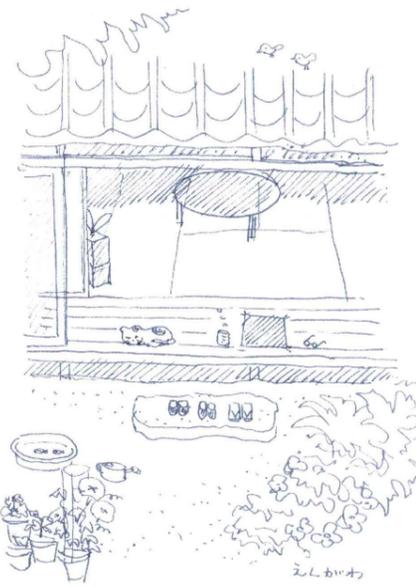
大切なことは、そこが居間という大きなルームの一部でありながら、居間と連続しかつ独立しているあいまいな空間であるということだ。共同の空間の中に、このような小さなルームを見出すことは、集団の中で個人の居場所をみつけられるということであり、そのことは人間の社会的性質と関係している。

その効果は住宅において顕著だが、公共施設においてもこのような空間の手法は重要であると考えられる。むしろ、公共の建物にこそこのような個人の居場所が必要なのだ。

なぜなら、自分の居場所を見出すこと、自分がそこにいることが正しいと感じられることは、人間の根元的な喜びだからである。住宅における自分の部屋はまさにそのような場所であるが、あたかも自分のためにしつらえられたようなスペースが公共の空間に見出されるとき、その空間は実存的空間であるといえる。

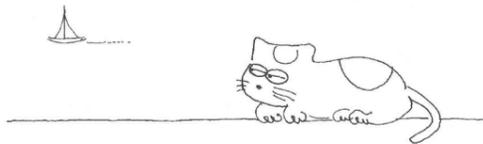
たとえば前川國男の美術館や市庁舎などには、町を歩いていてちょっと立ち寄ってくつろぐことのできるロビーや中庭が豊富に見られる。それは都市の中の「居場所」であり、その関係は居間とベイ・ウィンドウのそれに似ている。

そういう空間が、現代の都市や建物には、ほんとうに少ないように思う。

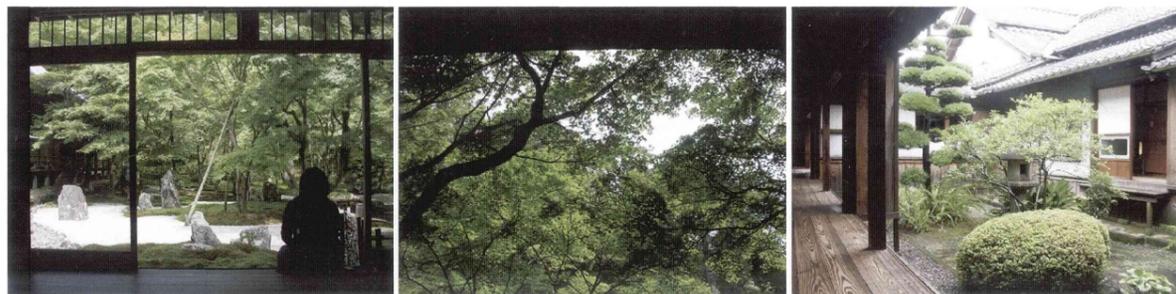


家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬は、いかなる所にも住まる。暑き比わろき住居は、堪え難き事なり。

兼好法師「徒然草」第五十五段



日当りのよい縁側に座ってぼんやりと外の世界を眺めることの心地よさを一番よく知っているのは、おそらく猫だと思ふ。居心地のよい空間はどこか、ということは動物に聞いてみるのが一番よい。



1 大宰府光明禅寺 2 同、庇越しに空を眺める 3 熊本、細川刑部邸

縁側は日本建築における特徴的な空間のひとつである。縁側という言葉は私たちにとって非常になじみの深いものであるが、その空間を客観視するために辞書をひもとけば、縁側とは「座敷の外の、庭に面した細長い板敷き」であるという。また、特に「雨戸の敷居の外側にある小さな板敷き」を、ぬれ縁という。その定義はきわめて単純かつ明快である。

しかしながら、縁側は、座敷（内部）と庭（外部）の間にあり、内部か外部かと問われれば、返答に窮するようなあいまいな空間でもある。

縁側は「庭に面する」ことから、多くの場合、それは座敷の南側にとられる。そして、部屋どうしをつなぐ動線として、南面いっぱいにとられることが多い。そのため、縁側は、庭を眺めたりして座してとどまる場所であると同時に、通路としての役割も持っている。このことは、縁側が「居場所」であるだけでなく、「出会いの場所」であることを示している。たとえば、ある晴れた日の午後、縁側でおじいさんがひとり庭を眺めていると、少年が学校から帰ってきて、今日あったたくさんの出来事を嬉しそうにおじいさんに話をすると、といった具合に。

縁側が出会いの場所になりうるのは、そこが家の中で特別に居心地のよい場所だからである。深い軒は日射をうまくコントロールし、夏は涼しく、冬は暖かい。

日本建築の場合、庭・縁側・座敷は建具によって仕切られているため、建具を開ければいつでもひとつつながりの空間になる。また、座敷の縁側に面する部分の建具は、たいていの場合障子であるため、視線はさえぎっても光は透過して部屋を明るくしてくれる。縁側は部屋の延長であり、庭もまた然りである。

それは日本の温暖な気候と大きく関係している。日本の住まいの環境において最も重要なことは、風通しのよいことであろう。日本の気候は、梅雨時にはかびやすく、夏は蒸し暑い。この時期、風通しの悪い家は地獄である。

日本人の建築観もまた、古来より壁によって閉じられた空間ではなく、外部の自然と連続した、開かれた空間を志向している。おおむね西欧の建築は壁によって守られた感覚を生み出すが、日本建築は屋根によって守られたシェルターの感覚を生み出す。

夏の暑い日、縁側に座って、一杯の麦茶を飲む。軒は深く、強い日ざしをさえぎる日陰をつくってくれる。一陣の涼風が心地よく通り過ぎるとき、暑さがすっと引いていくのを肌で感じる。すいかの種を庭にとぼしてみたりする。軒下には風鈴やとうがらしなどを吊るしておく、風がとて身近なものに感じられる。洗濯物なんかも、あつという間に乾いてしまう。外はたしかに暑い、縁側に座っていると、そこはとて涼しい。蝉しぐれの声に耳を傾けていると、暑さもまた悪くないと思う。

秋、縁側には夕陽が長い影を落とす。庭の木々は紅葉し、何気ない日常の風景が、日一日と劇的に変化してゆく。縁側に腰をおろし、一枚また一枚と散りゆく紅葉を見ていると、妙にせつなく、気持ちが高揚してしまつて、なぜかふいに焼き芋が恋しくなったりする。鈴虫の声を聴きながら、一日の終わりのひと時を縁側で過ごす。五時の鐘が夕空に流れると、やがてつるべ落としの日が暮れる。

冬の晴れた日、縁側には太陽があそびにくる。軒は深い、日ざしは縁側の奥まで入ってきて、冷えた背中をあたためてくれる。風はかわいて少し冷たいが、凜と澄みわたった空気の中で太陽の光を浴びて、満ち足りた気持ちになる。足の爪を切るなら縁側にかぎる。切った爪はその辺の土に撒いておけばいい。あたたかいお茶を飲んだり、お菓子をつまんだり、家族や友人と話をしているうちに、あつという間に日が暮れてゆく。家の中からは、夕食のいいにおいが流れてくる。

春、縁側に腰掛けて小さな庭を眺めてみると、草花はいっせいに芽吹き、まぶしいばかりだ。虫たちも目を覚まして、せわしく動きはじめる。庭はひとつの世界をつくっている。私たちは縁側にたたずみ、自分もまたその世界の一員であることに安らぎを感じることができる。春の庭は生きんとする意志に満ちている。今日のお昼は縁側で食べようと思う。そして春の日ざしは眠気を誘う。

ひとくちに縁側といっても、さまざまな縁側がある。

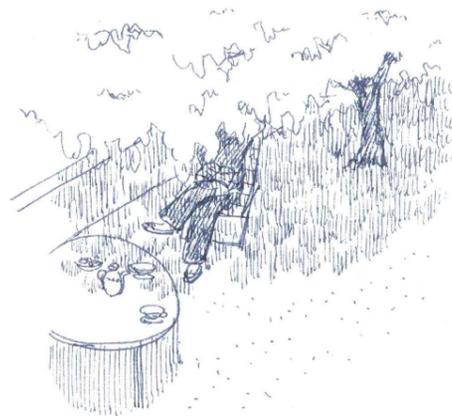
都市の中の小さな庭に開かれた縁側。雄大な自然の風景の中に開かれた縁側。大きなお屋敷の立派な庭園に開かれた縁側。小さいが住まい手の個性にあふれた縁側。下町の路地に開かれた縁側。田舎の畑に開かれた縁側。海の見える縁側。

しかし、そうしたさまざまな縁側に共通することは、いずれも外の世界に開かれた、家の内と外をつなぐ空間であるということだ。そのことはきわめて当たり前のことのように思えるが、自分が家の中に守られていて、なおかつ外の世界とつながっていると感じられるということは、人間の精神の健康にとってもっとも大切なことであるように思う。

たとえ一人でいても、自分は独りではないと感じられることは、現代の都市にあふれる集合住宅の多くに、決定的に欠けている性質であろう。幼い日に縁側で過ごした多くのすばらしい時間は、今や当たり前の経験ではなくなりつつある。

縁側は、光に満ち、移ろい行く四季の変化を感じることができる。そこには揺るぎのないしっかりとした一年のリズムがある。そして自分という人間もまた、その揺るぎないリズムの中に生きる世界の一員であり、またその世界の一員に過ぎないことを知る。

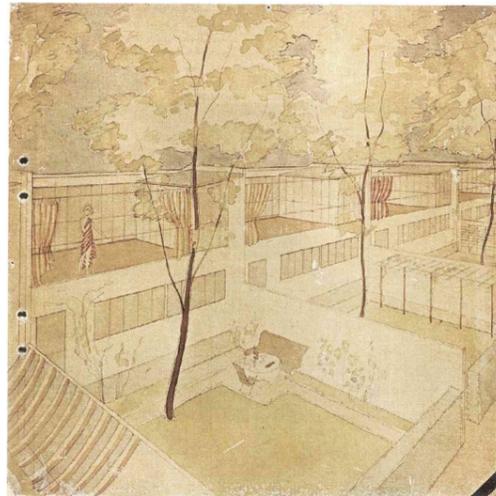
そのことが、とても重要な、かけがえのないことであるような気がするのである。



木陰でいそやすみ

庭は、草取りは行き届いているものの整然とした、という印象からはほど遠く、かと言ってあれもこれもと涙ぐましく植え込んでいる手合いでもなければ殊更に趣味的でもなく、もちろん殺風景でもなかった。要するに、長い時間とちょっとした律儀さの積み重ねでそうなっただけで、庭の主にそれ以上凝る気はまったくないらしい、ということがよくわかるのだった。青い葉を繁らせているモミジ、隣の家の物置の屋根にまで腕を伸ばして赤い花を咲かせているキョウチクトウ、アオキはつやつやして、コデマリは見事にざんばらだ。オレンジ色のユリが、なんの脈絡もなくあちこちに顔を覗かせ、青い火鉢がいかにも満足気に、てん、と土の上に座っていた。そして庭の真ん中に、時折かすかな上空の風に葉を揺らしながら、その大きな木が立っている。じっと見上げているうちに、私はその場に座り込んで眠ってしまいたくなった。

湯本香樹実「ボブラの秋」



レヴェレンツ テラスハウスの計画

同型のユニットが連続するプランだが、それぞれの住戸が専用の庭を持ち、木陰での食事など屋外での楽しい生活が想像できる。それぞれの庭は小さくても、住戸ごとに植えられた樹木が借景となって空間に広がりを与えている。



私の家。1 庭からの眺望 2 庭の洗濯物 3 庭の木陰 4 サクラの木越しに空を見る

私の家の小さな庭の一角には、鳥がどこからか種をはこんできて、知らない間に育った若いサクラの樹がある。私の父が鉢を2,3個吊り下げて重しにして枝を引っ張り、高さ1.8mくらいのパーゴラのような空間をつくった。

そのため、このちいさなサクラの樹の下には、椅子を出して座るのにちょうどよい、2m四方程度の木陰ができています。

特に新緑の季節には、エメラルド色の葉を透かして太陽の光がきらきらとこぼれ落ちる。背後を守るように家の壁が立ち、頭上をやさしくおおうサクラの樹とともに、落ちついたシェルターのような、居心地のよい、不思議な場所をつくりだしている。そこに座って、葉の合間から空をながめるのが私は好きだ。流れる雲。飛んでゆく飛行機。ひとすじの飛行機雲。

さいわい、庭の前は原っぱになっているので、背後と頭上を守られた中から、広い眺望をほしいままにできる。ほんのときどき、50mほど向こうにある小路を、おじさんだかおばさんだか、あるいは近所の子供たちが、歩いて行ったり、自転車で通り過ぎてゆく。

この小さな木陰は虫たちや動物たちにとっても気持ちのよいものであるとみえて、いつも何匹かの羽虫がぶんぶんやっていたりする。彼らの様子を観察していると、たいていは同じところを行ったり来たりをくり返している。きっと自分の領域を持っているのだろう。5月を過ぎると蚊も多くなるが、たいていの場合、彼らのほうが先客なので仕方がない。その場合はすこすこ家の中に退散することになる。また、隣の塀をつたって近所の猫がやってきたかと思うと、こちらに気づいて引き返してゆく。そして夏が近くなると、蜘蛛が巣を張りはじめたり、真っ黒な熊蜂があらわれて怖い思いをしたりする(実際は熊蜂が人を刺すことはほとんどない)。秋が近づくとサクラのパーゴラから芋虫がだぼだぼと落ちてくる(こちらは毛が刺さるとおそろしくかゆい)。

それでも、その木陰は家族には人気がある。さくらんぼの実る時期には、家族そろってパーベキューをしたりする。

なぜこの空間が「居心地がいい」と感じるのかを少し客観的に考えてみよう。

空間としては、それは庭の一角であり、囲み感があり、ある領域を規定している。庭自体は決して広くはなく、幅2m程度の、身体的尺度に合ったスケールを持っている。二方向をL字型に家の壁に守られ、頭の上を覆うサクラの樹は人を包み込むシェルターの感覚にあふれている。人によってはいくぶん狭いと感ずるかもしれない大きさでありながら、それでいてうっとろしく感じないのは、囲み感と同時に視界のひろがりや風の抜けといった開放感があるからだ。

そこには、領域を限定するということと、空間が開けていることという、一見正反対の性質が同居している。だが、この二つの性質は居心地のいい空間に共通するもっとも基本的な性質であると考えられる。建設という行為の目的そのものであるとっていいかもしれない。

当たり前だが、空間を限定しすぎると、とても狭苦しい空間になる。一方で無限定にひらけた空間は、とりとめのない茫漠とした空間になってしまう。たとえば、地平線までつづく広い草原は気持ちがよく、心を解放してくれる。時には希望を与えてくれる。しかしその広い草原のまんなかに入ったとき、居心地がよいと感じるだろうか。言い換えれば、安心できると感じるだろうか。

おそらく否であろう。そのことは、人間の祖先が樹上の生活を離れて、はじめて二本足で大地に立ったときから、私たちの遺伝子の中に受け継がれてきた本能的な性質であろう。彼らにとって無限定に広がる大地は、新たな可能性に満ちた未知の世界であると同時に、肉食獣に襲われたら逃げ場のない危険な場所であった。

もちろん、現代の文明社会に生きる私たちがそのような危険を実感として感じることはほとんどない。しかしながら、現代に生きる私たちも、心のどこかで安心できる精神のよりどころを求めているのではないだろうか。そのことが、居心地のいい空間を考えることと深く関係していると思われる。

庭の前の原っぱでは、春には一面のタンポポが、初夏には真っ白なマーガレットが群をなして咲く。マーガレットが枯れると、生命力に満ちた、名前も知らない黄色い花がいちめんに咲く。遠くで鳥の鳴く声。夏には蝉が、秋には鈴虫やコオロギやたくさんの虫たちが楽しい音楽会に誘ってくれる。自然のゆるぎないリズムの中で、季節の変化を感じる。

ここに座っていると、時間がとてもゆっくりと、確かさを持って流れてゆくような気がする。そういう時間は、決してむだな時間ではなく、必要なものだと思う。それは生きていることの楽しみといえるような時間である。そういう時間は、普段の忙しい生活のなかでは意識しないような、基本的なことを思い出させてくれる。私たちは、実にたくさんの命に囲まれて、暮らしている。

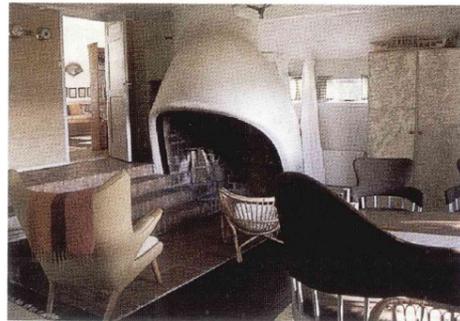
日々の雑多な忙しさから少しの時間、自分を解放し、しばし佇む。そういう時間が、とても大切な気がするのである。



火の辺

おそらく大自然は、火よりも見事な見世物をもってはいないだろう。家はぴたりと閉めきって、夜が外でひとりぼっちだ。にもかかわらず、火炎地獄の窓口に在るわたしたちのほうで、その野原よりも、もっと大自然の近くにいるのだよ、プラテロ！火は、家の中の宇宙だ。火は傷口に流れ出る血のように、赤くて限りがない。血に関してのあらゆる記憶をともなって、火はわたしたちをあたため、わたしたちに鉄の力をあたえてくれる。

ヒメーネス「プラテロとわたし」



夏の家(設計、E・G・アスブルンド)

特徴的な形の大きな暖炉が居間の片隅にすえられている。これはこの地方の伝統的な民家によく見られる手法であるという。暖炉は家の中心を強く印象づけている。

火を見ていると不思議と安心を感じる。

冬の寒い日、家に帰ってくると、まずストーブのそばで身をあたためる。「火にあたる」という言葉にはある種の幸福が感じられる。また、食べ物を調理するとき、加熱することを「火を通す」という。私たちは、日々火からエネルギーをもらって生きている。

一方で、火はとても恐ろしい存在でもある。

たった一本の煙草の不始末で家を焼いてしまうこともあれば、山ひとつ焼いてしまうこともある。それほど遠くない未来、いずれ自分自身を焼くであろう火を、時に恐怖することもある。

火は、安心と恐怖という、相反する性質をあわせ持っている。

火を囲む場所には、多くの場合、食事がセットになっている。日本の民家に見られる囲炉裏がそうであるように、炉は暖をとると同時に調理の道具でもある。

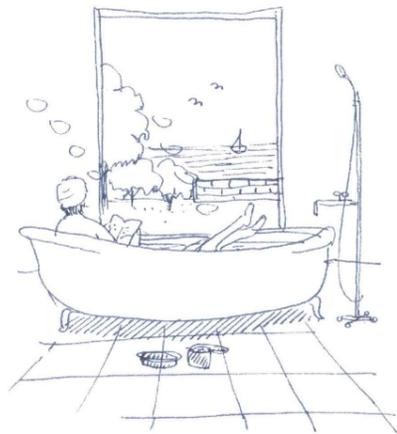
また、みんなで食卓を囲むことは、自分たちは仲間であるということの意味する。食事の時間は、何にもまして家族を実感する。鍋を囲んだり鉄板焼きを囲んだりする食事は、特に楽しい。それは食べる人みんなが食事を作ることに参加できるためであろう。

キッチンが食堂に近く、ひとつながりの空間になっていれば、みんなでわいわい料理をしながら食事を楽しむことができる。台所と居室がひとつながりになった小さなアパートに集まって、みんなで料理をしながら肩寄せ合って食べる食事が特別おいしいのは、みんなで集まっているということはもちろん、そのように感じられる空間のスケールも大きく影響している。台所がどこか遠くにあつて、長い廊下を通して料理が運ばれてくるような食事では、このような楽しみを得ることはできない。あらたまった席ならともかく、毎日食べる家庭の食事のあり方は、住まいを考える上でもっとも大切なことのひとつである。

日本の民家の中心に囲炉裏があるのと同じように、西洋の家では暖炉が家の中心に据えられる。それはノルベルグ＝シュルツが言うように「昔から住まいの中心そのもの」であり、「住居における伝統的な核」である。そして暖炉の周辺には、その家で特に居心地のよい「座れる場所」がある。

「火を囲む」ということは、場を作ることの始まりである。火という中心に向かって人びとがそれを囲むように座るとき、自然と輪になろうとする。竪穴住居やゲルなどが円形であるのは、そのあたりに根があるのかもしれない。ノルベルグ＝シュルツは「場所は、基本的には「円形」である」という。ここでいう円形とは、文字通りの円を指すというよりは、「中心を持った領域」を示すものと考えられる。

人間は火を使うことのできる唯一の動物である。はるかな昔、人びとは火を絶やさないとによって獣たちから身を守ってきた。そして、狩りをして獲た肉を火で焼いて生命をつないできた。火を得ることによって、夜は恐ろしい暗闇ではなくなった。私たちは火を見るとき、そうした人間の生命の原初の記憶を心のどこかで感じているのかもしれない。



バスルーム

私は毎日二時間お風呂に入る。

夫婦で家を買うとき、私の望んだことは二つで、「お風呂場に窓のある家。お風呂場の壁が、合成樹脂じゃなくタイルの家」というものだった。

バスタブに身体をのぼし、窓をあけて外気を取り入れ——雨の日はこまかい雨粒が降りこむ。水面に雨粒の落ちるさまは、それはそれは心優しい——ながら、私はきまって本を読む。

江國香織「くつろぎの時間」



鷺沼の住宅（設計、竹内裕二）

バスルームの窓から、湯船に浸かる視線で外を見る。坪庭→廊下→中庭→庭と、いくつもの空間の層が重なりあって豊かな眺望を生み出している。

住まいにおいて、お風呂は、基本的にはきわめて個人的な場所である。

そこで人は一日の疲れを洗い流し、一日をふり返って反省したり、鼻歌を歌ったり、湯船に花を浮かべてみたり、雑誌を読んだり、ラジオを聴いたりして、思い思いの時を過ごす。

短い人では5分くらいで出てくるカラスの行水のような人もいるが、長い人では一日のうち2~3時間もお風呂で過ごすというから、バスルームはただ体を洗うという必要な機能を満たすだけでは十分とはいえない。そこはひとつのルームとして、居心地のよいものでありたい。

ところが、現在の日本の住宅の中でのお風呂の位置づけを思い浮かべると、その多くが個々の居室を広く取ることばかりに気をとられて、バスやトイレといった水回りの空間は、いわばその残余の空間に追いやられている感がある。

たしかに、これらは居間や食堂などと比較すればオーダーをつけられてしかるべき空間だが、人間の居場所として、これでいいのだろうか、という疑問が生じる。

特に、バスルームに窓がひとつもないケースが多いのは問題である。

窓がない以上、換気や照明は全面的に機械に頼ることになり、たとえば休日の昼下がりには、太陽の光が射し込むお風呂でゆっくりとくつろぐことなど望むべくもない。高密度な集合住宅のようにどうしてもやむをえない場合もあるだろうが、しかしバスルームがルームであるためには、光と風が通り抜ける窓は必要不可欠なものである。

プライバシーを考慮しさえすれば、バスルームはおどろくほど快適な居場所をつくることができるだろう。

たとえば、湯船につかりながら窓の外を眺めることができ、さらに贅沢を言えば、窓の外に坪庭のような空間をつくって緑が見えると良い。また、壁や植栽などによって適切にプライバシーが守られたデッキなどがあれば、椅子や縁台を置いて、空を見ながら時を過ごすこともできよう。夏の暑い日にはそこで夕涼みもできる。

ほんの小さな空間でも、そういう居場所があるだけで、毎日がすこし幸せな気分になれるだろう。



プラテロ、きみは一度も屋上テラスへあがったことがないね。せまい木の階段の暗がりからそこへ出たとき、どんなに深い息が胸をふくらますか、きみにはわからないのだよ。ぎらぎらする太陽にからだを焼かれ、大空のすぐそばにるようにその青いろにどっぷりつかり、テラスの石灰の白さに目のくらむ思いがするのだ。

ヒメネス「プラテロとわたし」

屋上は、ひとつのちいさな別世界を生み出す。

アンダルシアの詩人ヒメネスの描く屋上テラスは、地中海地方の伝統的住居では一般的な空間である。

それは雨が少ないという気候的な条件から自然に生まれた形態であり、降った雨を集めて雨水溜めに落とし、溜めておくという機能を持っている。きれいな水を落とすために、テラスの床は石灰で白く塗られている。

それは日本建築のように雨を「流す」屋根ではなく、「集める」ための屋根であり、屋根は床面を兼ねている。

だが、日本は雨の多い国である。一年のうち3分の1は雨が降るというほど、雨は身近な存在である。したがって、地中海地方のようなフラットルーフの屋上テラスをそのまま取り入れようとすれば、多かれ少なかれ無理が生じよう。

アスファルトの防水層は劣化をまぬがれない。亀裂が生じたり、端からめくれてくることも考えられる。雨仕舞をきちんとしておかないと、住まいとして使い物にならなくなってしまふ。

そうは言っても、屋上テラスの空間の持つ魅力には抗いがたい。

たとえば、吉村順三の「軽井沢の山荘」では、片流れの屋根の上に、小さな屋上テラスを乗せている。勾配屋根でしっかり雨水を落とし、その上に床面をつくることで、日本のように雨の多い地域でも、合理的に屋上テラスを作ることができる。

「屋上テラス」という言葉には、機能的なレベルでは説明し得ないような、空間的魅力がある。そこでは洗濯物を干したり、パラソルを立ててくつろいだり、昼間からワインを空けたり、夕涼みをしたり、りんごをまるごとかじったり、星空を眺めたり、とさまざまな魅力的なシーンが想像される。

それは、ある種のあこがれのようなものだ。

そしてそれは、ひとりになれる場所であり、

恋人と過ごすことのできる場所であり、

親しい人たちだけで小さなパーティのできる場所にもなりうる、

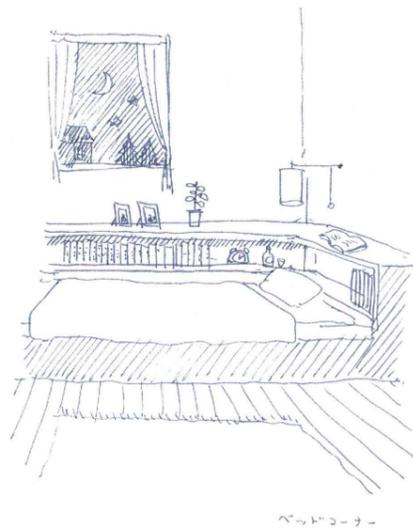
すばらしい居場所であるといえる。

屋上にある、ということが、居場所としてのこの空間の固有の魅力を生み出しているように思われる。

それはふつうの「テラス」にはない、ある種の非日常性を備えている。

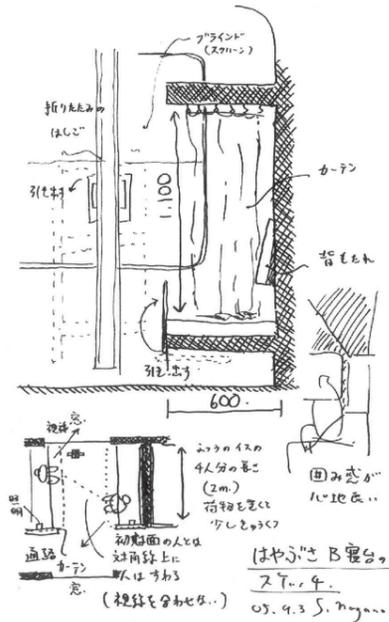
日常の中にありながら、そこからちょっと抜け出すことができる。周囲に視界をさえぎるものはほとんどなく、自分の住む世界をいつもとは違う視点から見渡すことができる。

そして、すこしだけ心を解放して、思い思いの時間を過ごす。



寝台が中心を表していることは、人間がそこから一日を始め、夜となればそこへ戻ってゆく場所であるとすれば、なお一層の説得力をもつ、とボルノウは指摘する。寝台において、一日の生活周期が閉じるのである。したがって、最も深い意味での寝台とは、人間が「休息のためにやってくる」場所、つまり、人間の運動が最終の目標を見いだす場所なのである。

ノルベルグ=シュルツ「実存・空間・建築」



寝台特急「はやぶさ」B寝台

昼間は長椅子、夜は寝台。  
最小限の寸法の中に生活に必要な最低限の機能のみをコンパクトに収めているが、背後を壁に守られ、頭上を低く抑えられた空間から窓の外を眺めていると、不思議と居心地のよい気分になる。



シー・ランチ(設計、チャールズ・ムーア他)  
「超寸法の家具」としてのベッドルーム

眠る、ということは、動物にとって生命を維持するために必要な行為であり、住まいの持つ基本的な目的のひとつである。それを無視したら住まいは成り立たない。

一方で、寝室(Bedroom)という部屋について考えてみると、それは単に眠るためだけの部屋ではないことは明らかである。たとえば、居間が家族の集まる場所としての性格が強いのに対し、寝室はプライベート性の高い個室として使われることが多い。本を読んだり、趣味の時間を過ごしたり。子供達が宿題をするのも、居間であったり自分達の寝室であったり食卓であったり、とさまざまである。

その時々状況や気分によって、人は居場所を選んでそこにとどまっている。人間は機械ではないから、寝室=寝る場所、居間=居る場所、食堂=食べるところ、といった対一の等式は成り立たない。寝室はただ寝られればいいというような設計の態度ではいけないのである。

寝室を最も特徴づける家具は、言うまでもなく寝台であろう。チャールズ・ムーアらMLTWによるシー・ランチでは寝室そのものが巨大な寝台のような「超寸法の家具」として扱われ、空間の中に4本の柱で自立して立っている。

寝台の囲み感や用途の多様性についての興味深い事例として、寝台列車の座席が挙げられる。それは、昼間は長椅子であり、夜になると敷布をかけて簡易的なベッドに早変わりする。2段ベッドになっている場合、そこに座ると頭上の天高は低く抑えられ、背後と側面を壁で守られているため、心地よい「囲まれた感覚」がある。いわば守られたニッチの空間から、窓の外の移りゆく風景を眺めることは何と喜びに満ちていることか。

寝台列車の場合、椅子とベッドという異なる機能を満たすためのぎりぎりの寸法として、座面の奥行は60cmに抑えられている。そのためベッドの横幅としてはかなり狭い。住宅でこのような手法を用いようとするならば、最低でも奥行75cmは確保したい。だがそうすると椅子としては座りにくくなるので、座面を引き出し式にするか背もたれを調節できるようにすれば、それぞれの用途に合わせて寸法を調節できる。

さて、寝室をより居心地のよいものにするには、どのようなことが考えられるだろうか。

たとえば、「本を読む」という行為に注目してみる。ベッドに入って手を伸ばせばすぐ届く位置に本棚があり、寝る前の数十分、好きな本を取り出して読む。何気なくページを繰っているうちに、まぶたが重くなり、読みかけの本にしおりを挟んで無造作に枕元に置き、そのまま眠ってしまう。あるいは、本を読むのに熱中してしまい、気がついたら東の空が明るくなり始めている……  
もともと読書はきわめて個人的な行為であるといえる。それはひとつの世界の中に入り込んでゆくようなものであろう。そのため、小さく囲い込まれた個人の居場所は、読書の場所としても魅力的である。

また、簡単なメモを取ることのできるような小さな机も寝台のそばにあるとよい。何か考え事をしながら一度はベッドに入ったものの部屋の明かりを消したとたん何か思いついてあわててペンと紙を探す、といったことはよくあるものである。

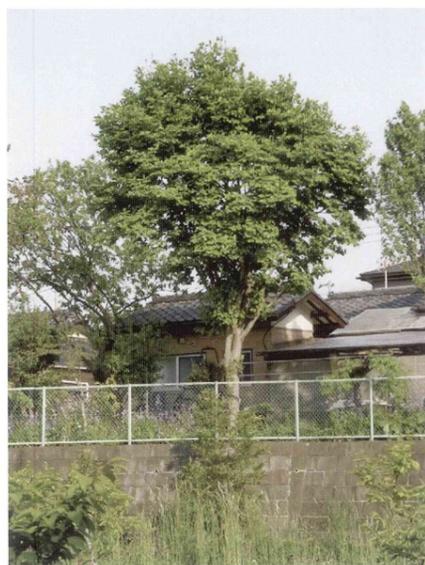
寝室は朝の目覚めとともに一日の始まる場所であり、夜ふとんに入って一日の終わる場所である。「始めが肝心」と「終わりよければ全てよし」の両方に関わる部屋であるから、責任は重大である。気持ちよく目覚めた日は気分がよく、寝覚めが悪いと一日中気分が憂鬱になることもある。また、一日の仕事を終えてくたくたになって帰ってきた時、寝室はやさしく人を包み込むような空間であってほしい。

そのためにまず重要なことは、寝室を出来る限り朝の光を受けることのできる位置に設けること、そして安心感を与えてくれる囲み感のあるニッチのような「巢の空間」をつくることである。



東山の麓に、いつか双幹の楢の大樹一樹が立っていた。珠玉の、あるいは環あらたまのとも言うべき戦後の現代建築が一つ、木を頼ってのようにその側に建っていた。建築作品は、この樹に護られて、とともにこの樹を護るために造られていたのである。一枚の大壁は舞台としての庭の背面をしつらえてそこに生う樹を護り、それ自体高樹の緑蔭に覆われていたのである。人は樹に凭よって、この舞台の一隅に佇み、中心の緑樹を、傍の建物の「虚白」を目守り、目守られて、そして風のわたる樹葉のさわぎにただひたすらに聴従した。いまこの原型を体した建物は無い。

田中 喬「記憶の風景」



私の部屋の窓から見える大きな樹（現存せず）



日野、多摩平団地の商店長屋（現存せず）

ひとつおとぎ話をしましょう。

むかし、ひとりの若者が、その土地に一本の樹を植えました。当時はまだ小さな苗木でしたが、若者はやがてその樹が大きく枝葉をひろげ、立派な大木になった姿を思い描いて、庭にその樹を植えました。

それはたいへん小さな庭でした。苗木のとなりには小さな家が立っていました。その家はたいへん小さな家でしたが、苗木を強い北風から守るには十分でした。小さな苗木は、小さな家に守られて、すくすくと育ちました。苗木と小さな家は友達になりました。

やがて苗木を植えた若者がおじいさんになるころには、かつての小さな苗木は、小さな家よりも高く高くなるのび、こんどは小さな家を雨風から守ってやりました。

おじいさんは小さな家の、小さな窓辺の椅子に座って、大きな樹の葉のやさしいささやきを聴きました。

おじいさんは幸せでした。

小さな家も幸せでした。

小さな家は古くなり、あちこち体が痛み出していたので、雨風をしのいでくれる大きな樹は、たいへん頼もしい友人なのでした。

時が経ちました。

おじいさんはすでに亡くなり、小さな家は幾度かその主を変えたのち、その役目を終えるときが来ました。

小さな家は言いました。

「大きな樹さん、あなたがまだ小さな苗木だったころのことを、私は昨日のことのようにおぼえています。かつて私はあなたを北風から守ってあげました。今ではあなたが私を守ってくれていますね。私はあなたのような友達をもてて幸せでした。

私はもうじき壊されるでしょう。

（今では立っているだけでもたいへんなのです。）

わたしがいなくなっても、あなたは

この先もずっとこの場所に立っていてくださいね。

そうして私を建ててくれたおじいさんの子供やそのまた子供たちに、私のことを話してやってください。」

大きな樹は枝をゆらして答えました。

「私もあなたのおかげでここまで大きくなりました。

私はあなたのことを決して忘れないでしょう。そして彼らが私の言葉に耳を傾けてくれるなら、喜んであなたのことを話しましょう。

でも、みんな忙しくて、私の声を聴いてはくれないかもしれませんね。

（私の声はたいへん小さいのです。）

ところで、彼らは今あなたが立っている場所に、

あなたのような小さな家を建てるでしょうか。

それとも、私を切り倒して大きな家を建てるでしょうか。」



強烈な個性の確立、それが何よりも今日の偉大な建築のトレードマークとされている。個性的でありさえすれば、歪んでいようが不純であろうがかまわない、というのが、今日、日本を含めて世界の建築界の状況でありましょう。…そこには、人間の精神の健康に必要な「無償の美しさ」は見るかげもない有様ではありませんか。

前川國男

これまでの章で、住まいにおける、私自身が魅力を感じる居場所について、体験やアイデアをまじえて考えてきた。

住まいの生命、ひいては建築作品の生命とは、つまるところ、人間の居場所としての「よき場所」をいかにつくるか、いかにさりげなくありふれた日常の出来事として、人間がとどまり、しばし佇むことのできる居場所をつくることができるか、という点に尽きると思われる。そこに、前川國男のいう「無償の美しさ」や、あるいはアレグザンダーのいう「無名の質」が生まれるのだろう。

それは見てくれの面白さやアイデアの奇抜さ、誰も見たことのないような形をひねり出すこと、とはほとんど関係ないことである。

むしろそれとは正反対のことである。それはもっとも平凡なことであり、当たり前のことである。誰の心の中にもあり、それゆえ当たり前すぎて忘れてしまいがちなことである。

今までの章では、いくつかの魅力的な居場所について、それぞれの項目について個々に検討してきた。しかし、私がここで試みようとしたことは、「パタン・ランゲージ」のように体系化された設計の手引きの書を作るのではないし、住まいの居場所はどのように作べきだなどというだけそれたことを言うつもりも更々ない。

ただ単純に、住まいの空間を、実感を伴ったイメージとして喚起させたかっただけである。自分にとって魅力的な場所、幼い日の記憶の中の原風景、今はもう失われてしまった大好きな場所、今は身近に存在しないけれどもあつたらいいと思う場所、そういった「よき場所」のイメージを、できるだけ客観的な言葉で記述しようとしたのである（そうっていない部分も多分にあるのだが）。

したがって、ここに挙げた空間の例を、住まいの空間はすべて持っていなければならないなどは考えてはいない。それを実証するにはこのエッセイはいささか気まぐれに過ぎるのである。

ただ、私たち一人ひとりが、自分にとって魅入られやすい場所や感動的な風景、しばし留まっていたいと思う場所、といった視野に立って建築や町を考えることで、現代の都市から急速に失われつつある「人間のための居場所」を、私たちはふたたび取り戻すことができるのではないだろうか、と考えている。

どんなに時代や社会が変化しようとも、そこにいるのはつねに同じ人間であり、同じ太陽の下で、同じように食べ、あそび、休息し、眠り、出会いと別れを繰り返しながら生きてきた。それは時代がどんなに便利になっても、本質的には何も変わっていない。

家の果たしてきた役割も、また同じである。

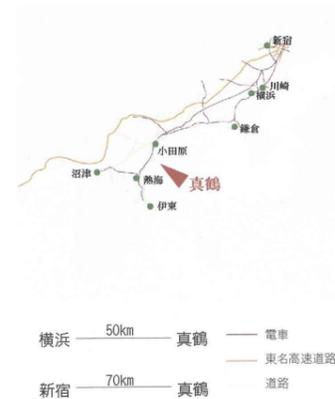
家はつねにそこに住まう人とともに在り、人々を守り、また同時に人々に守られながら生きてきた。家は人びとに守りと安らぎの場を与え、人々は家を美しく飾った。花々や、椅子や、テーブルや、パラソルや、思い出の品々や、絵や、写真や、壺や、洗濯物などで。それは人間が遠い昔に家を建てることを始めたそのときから、本質的には何一つ変わっていないことである。

そのように生きることのできた家は、きっと幸せだろうと思う。反対に、ただ道具として建てられた家は、きっと哀しい思いをしているにちがいない。

私たちはいま、どちらの家とともに在りたいと願うだろうか。



07.11.17.

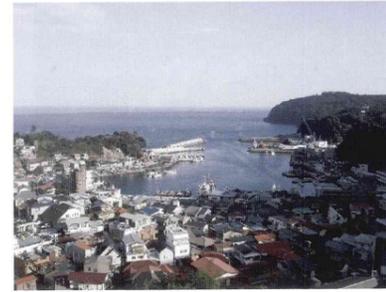


真鶴町は、神奈川県西南部、首都圏100km内に位置し、南東部に港を持つ。長さ約7km、幅約1km、面積7.02km<sup>2</sup>の、県内で2番目に小さな町である。人口は8,793人、3,301世帯(平成16年現在)である。

北部は箱根火山の山麓であり、小田原市と湯河原町に接する。山裾にはみかん畑が広がっている。南部は相模湾に向かって箱根外輪山の支脈が突出して真鶴半島を形成する。半島の突端には、初日の出の名所としても有名な真鶴の聖地「三ツ石」がある。

主な産業は観光業関連のサービス業が32.9%と多く、漁業や石材採掘業も港町真鶴を特徴づける重要な産業である。

横浜 50km 真鶴  
新宿 70km 真鶴  
— 電車  
— 東名高速道路  
— 道路



丘の町

火山の噴火による溶岩流によって形成された町であるため、町全域が起伏に富んだ複雑な地形をなし、平坦地はほとんどない。町の中心部は港を囲むように雛壇状に住宅が立ち並び、その間を細い路地(背戸道)が通る。



石の町

北部の高地の一部には石切り丁場がある。ここでは良質の安山岩の一種であり、真鶴でしか産出されない「本小松石」が採掘される。本小松石は独特の青みがかった灰色のものが最高級とされ、磨くと深みのある美しい光沢が現れる。江戸城築城の際石垣として用いられた。風化に強く墓石として根強い人気がある。またやわらかい赤色の石は「赤ボサ石」と呼ばれ、庭園などに用いられる。



港の町

真鶴港は漁業の拠点であるだけでなく、石材を運ぶガット船が停泊し、真鶴港の風景を強く特徴づけている。港には漁船をあげておくための雁木が残るほか、定置網用の網を干している光景に出会える静かな港である。また、ヨットハーバーや遊覧船乗り場もある。



祭りの町

貴船神社は寛永元年(889年)に創建された。貴船祭りは日本三大船祭りのひとつで、海上安全を祈願して毎年7月27・28日に催される。真鶴の人はみな祭りが大好きである。この日が近づくと、町全体が祭りに向けて動き出す。祭りが始まると静かな港は一変する。華やかに飾られた小早船や囃子船が行き交い、舟歌やお囃子、大砲の音が港に響き渡るかと思えば、一転した静けさの中で鹿島踊が奉納される。神輿や花山車が町中をねり歩く。



緑の町

真鶴半島の先端には、「御林」と呼ばれ、魚付き保安林として昔から大切に守られてきた森がある。森は海水温度の変化を抑えて魚の棲みやすい環境をつくる。江戸幕府の命によって植樹されたマツの群生は樹齢400年にも及び、シイ、クスの巨木が生い茂る。暗く深い森は港とは対照的な町の聖地である。



「美の条例」の町

先人たちの築いてきた美しい自然や町並みを受け継いでゆくために、過度な観光化や大型マンションなどの乱開発から町を守るために、「美の条例」が制定されている。これはC・アレグザンダーの「パタン・ランゲージ」をベースとしながら、真鶴独自の風景を記述し、建物をつくる際のガイドラインとしている。町の風景を尊重し、風景との調和を図り、その美しさを愛する精神に貫かれている。



空間が我々に語りかけるためには、開口部、限界、明確な高低差そして方位を定める点などが必要である。まっすぐな道路は無言である。我々は道路に対して、忘れられないランドマークで終わることを直感的に望んでいる。つまり道路とは、曲がりくねって、空間的な制約と自由の感覚で我々を締めたり弛めたりして、新しいそしてさまざまな視覚経験で我々を驚かせたり喜ばせたりするものであることを望んでいる。会話と同様に空間は、もし我々に何かを告げるとすれば、多様で豊かなものでなければならない。

フォレスト・ウィルソン「構造と空間の感覚」



真鶴



下田

### 中世の町の骨格

真鶴の街区の構造は、地形のロジックにあわせ、等高線に沿った道が港を囲む。

岡本哲志氏によれば、このように地形に沿った有機的な町の構造は中世の町の特徴であるという。それは、近世以降に発展した町と比較してみるとよくわかる。

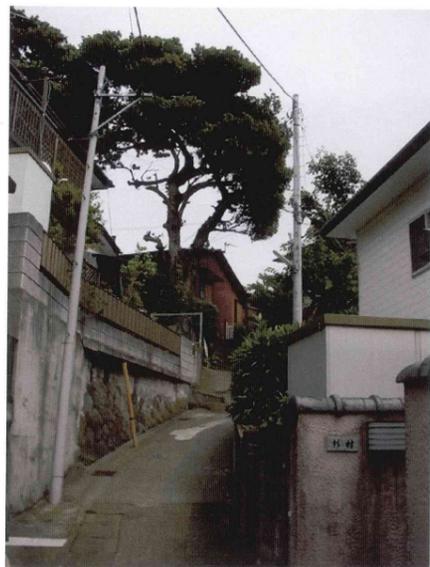
たとえば、下田は海に面して川沿いの平坦地が広がっているため、近世にグリッド状の街区構造がつけられた。地形の中に近代化を受け入れる素地があったのである。

真鶴は地形の起伏のために大規模な開発ができなかったことと、温泉が出ないことで隣の湯河原や熱海のような過剰な観光化の波をのがれることができた。車優先の区画整理によって多くの町が失ってしまった、地形との対話や細やかな路地のネットワークが今なお息づいている。そのことが人間主体の町という新たな価値として、近年見直されてきている。

背戸道 車の入れない路地空間。生活の動線であり、血管のように張り巡らされたネットワークを形成する。



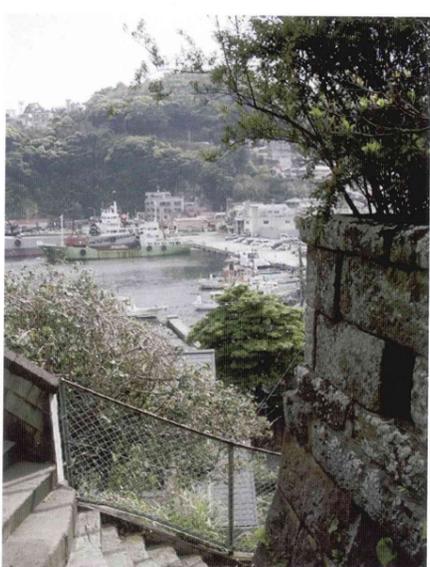
1 大通りの商店の間から一歩足を踏み入ると、そこは石垣やブロック塀にはさまれた、細く曲がりくねった路地。



2 一本の大樹が風景のランドマークとなっている。



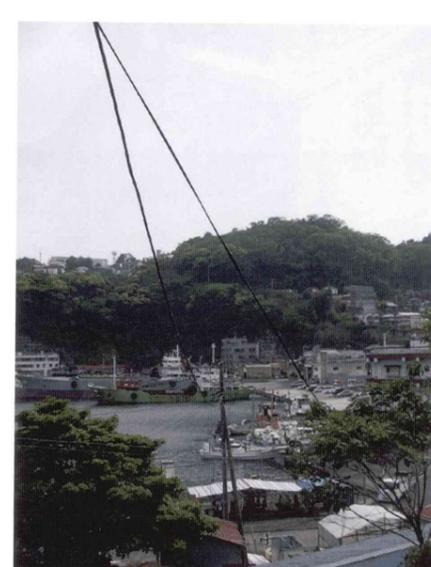
3 空間が開け、踊り場のような場所に出る。家々へのアプローチも劇的である。ここから見ただけでは、この石段が家へのアプローチ階段なのか、さらに先に道が続いているのか分からない。



4 道は石段の途中で二手に分かれてつづいていた。石段の途中から港への眺めが開ける。塀や家並みの間から垣間見る港の風景は、真鶴の町を特徴づけている。



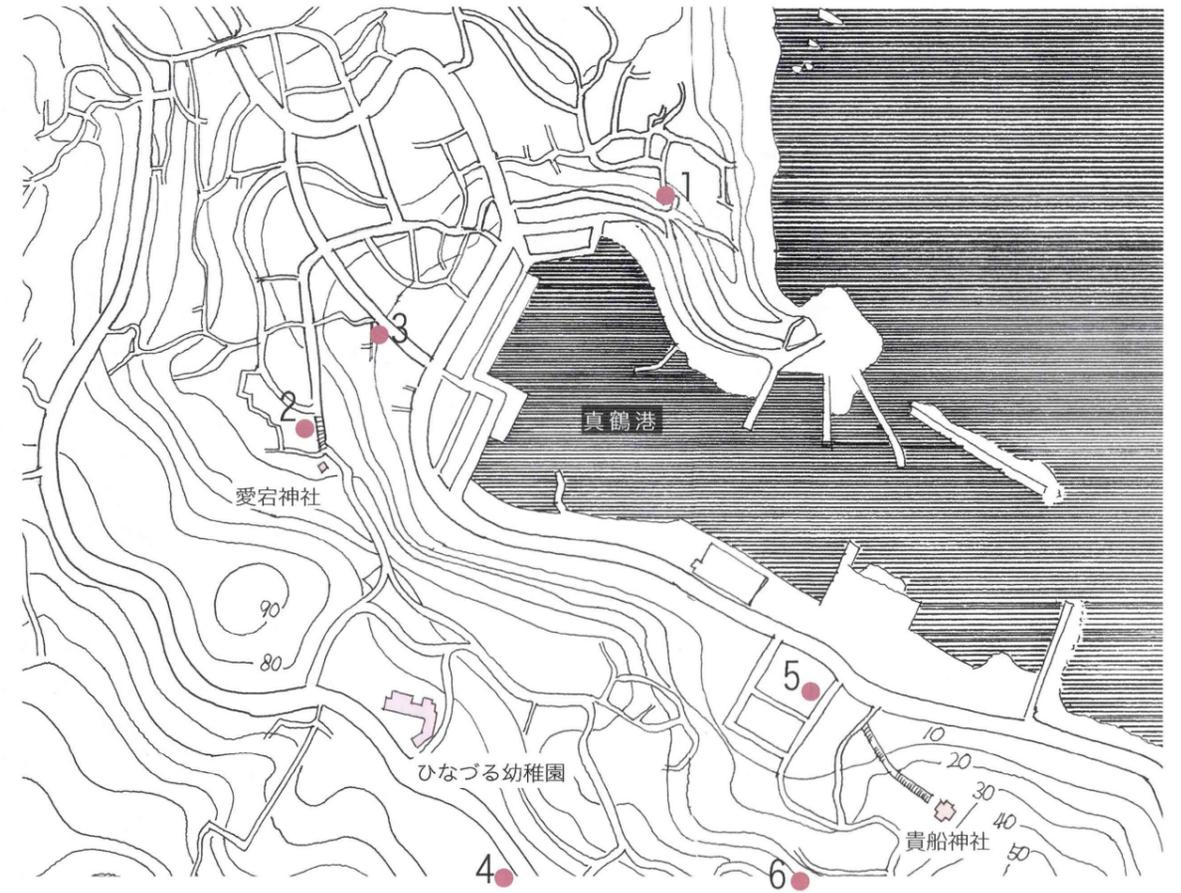
5 石段も地形なりに曲がり、振り返ると町の風景が垣間見える。町の中心から離れていても町に住んでいるという感覚がある。



6 さらに進んだところで、眺望の開けた石段に腰掛けて港を見下ろす。登ってきたはずが下り道になっていた。



真鶴の風景を特徴づけるものとして、町のいたるところにあるささやかな風景がある。  
 石垣や石段の隙間に咲く小さな花。なにげない街角に祀られた祠や稲荷。家々の外階段にきれいに飾られた植木鉢……  
 こういったさまざまな日常の風景は、その土地に固有のものとして息づいている。



1 石段に咲く小さな花。  
よくみると石段の隙間には斜めの線が彫りこんである。  
先人たちがいかにこの土地を愛し、丁寧に町をつくっていったかがうかがえる。



2 壇状に積まれた石垣。  
コンクリートの擁壁ではない石積み  
の斜面には、石と石の隙間に草花が育ち  
美しい風景をつくっている。



3 町角に祀られた小さな祠は、ひとつの  
ランドマークとして強い印象を与えて  
いる。



4 港から少し離れた道にも祠がある。  
急いで歩いていると気づかないよう  
なところにも、小さな風景が静かに  
息づいている。



5 民家の前の道には、海藻が干してあ  
ったりサザエの貝殻が木箱に山積み  
になっているような光景によく出く  
わす。港町ならではの風景である。



6 坂道が多いため、玄関へのアプローチ  
の外階段をよく見かける。このよう  
に階段を植木鉢などで豊かに飾ると、ま  
るで舞台装置のようである。

夜、祭りの興奮は最高潮に達する。  
小早船や囃子船に明かりが灯り、港は幻想的な雰囲気包まれる。



神輿が貴船神社からゆつくりと降りてくる。  
翌日、神輿を担いだ男たちが祭りの最後にこの石段を勢いよく登ってゆく。



花山車が町中の家を一軒一軒ねり歩く。



鹿島踊りの奉納の場面。

### 第3章 計画—「居場所」と「場所」が会うこと

別荘として使われてきた住宅の計画である。

施主は30年前にこの家を購入、以来休暇のための小屋として使ってきたが、今では痛みがはげしく、草木が伸び放題に茂り、荒れ果てた廃屋の様相を呈している。

ル・コルビュジエが愛したカップ・マルタンのようなこの風光明媚な土地を、施主はいずれ終の住処にしたいと考えている。

施主の要望は、海を見る屋外的な生活の場を作ること、職業柄多くの蔵書を所有しているため、それらを飾る大きな本棚、さまざまなものを蓄えておく地下室などであった。

計画概要

工事名称	清節庵建替工事
建築場所	神奈川県足柄下郡真鶴町真鶴
主要用途	専用住宅
工事種別	新築工事
建築主	富永 譲
工期	未定

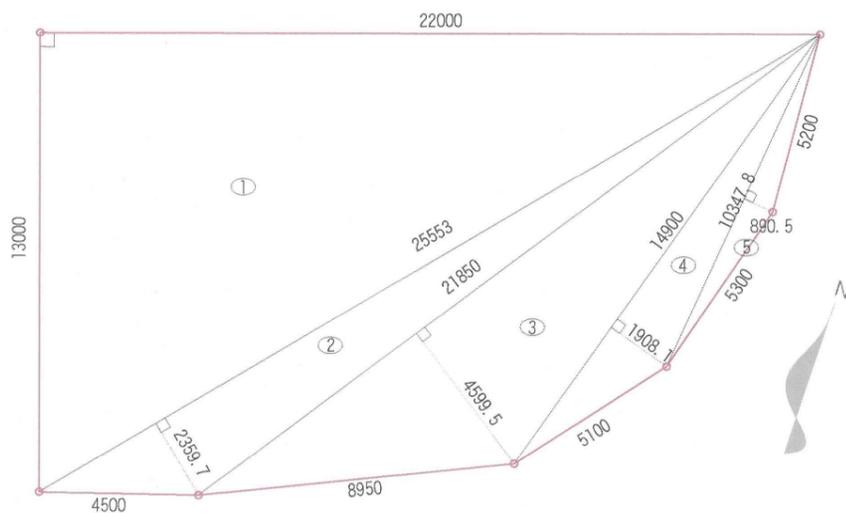
工事概要

敷地	敷地面積：242㎡	面積	申請部分	申請以外の部分	合計	敷地面積に対する割合
	許容建蔽率：50%		建築面積	74.3㎡		
規模・構造	許容容積率：100%	延床面積	申請部分	申請以外の部分	合計	敷地面積に対する割合
	用途地域：真鶴町まちづくり条例による半島景観特別地区		延床面積	141.84㎡		
規模・構造	第1種低層住居専用地域に準ずる。高さ制限10m、傾斜屋根	各階床面積				主要用途
	防火地域：無指定	階	申請部分	申請以外の部分	専用地	
規模・構造	構造：鉄骨造一部RC造	地階	56.565㎡		専用住宅	
	基礎：ベタ基礎	1階	62.100㎡			
階数：地上2階地下1階	2階	23.177㎡				
最高高さ：8.1m	備考	「美の条例」と呼ばれる真鶴町まちづくり条例の精神を尊重し、風景に調和し、より引き立てる建築を目指す。				
最高軒高：7.3m						

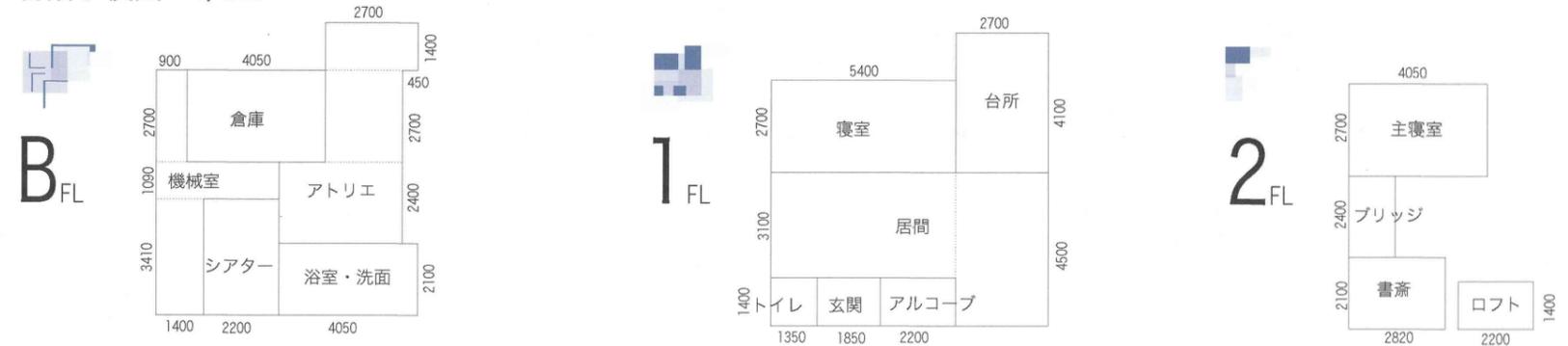
地積図 1/200

- ① 22.0×13.0×1/2=143.0㎡
- ② 25.5530×2.3597×1/2=30.1487㎡
- ③ 21.850×4.5995×1/2=50.2495㎡
- ④ 14.900×1.9081×1/2=14.2153㎡
- ⑤ 10.3478×0.8905×1/2=4.6073㎡

計 242.2208㎡



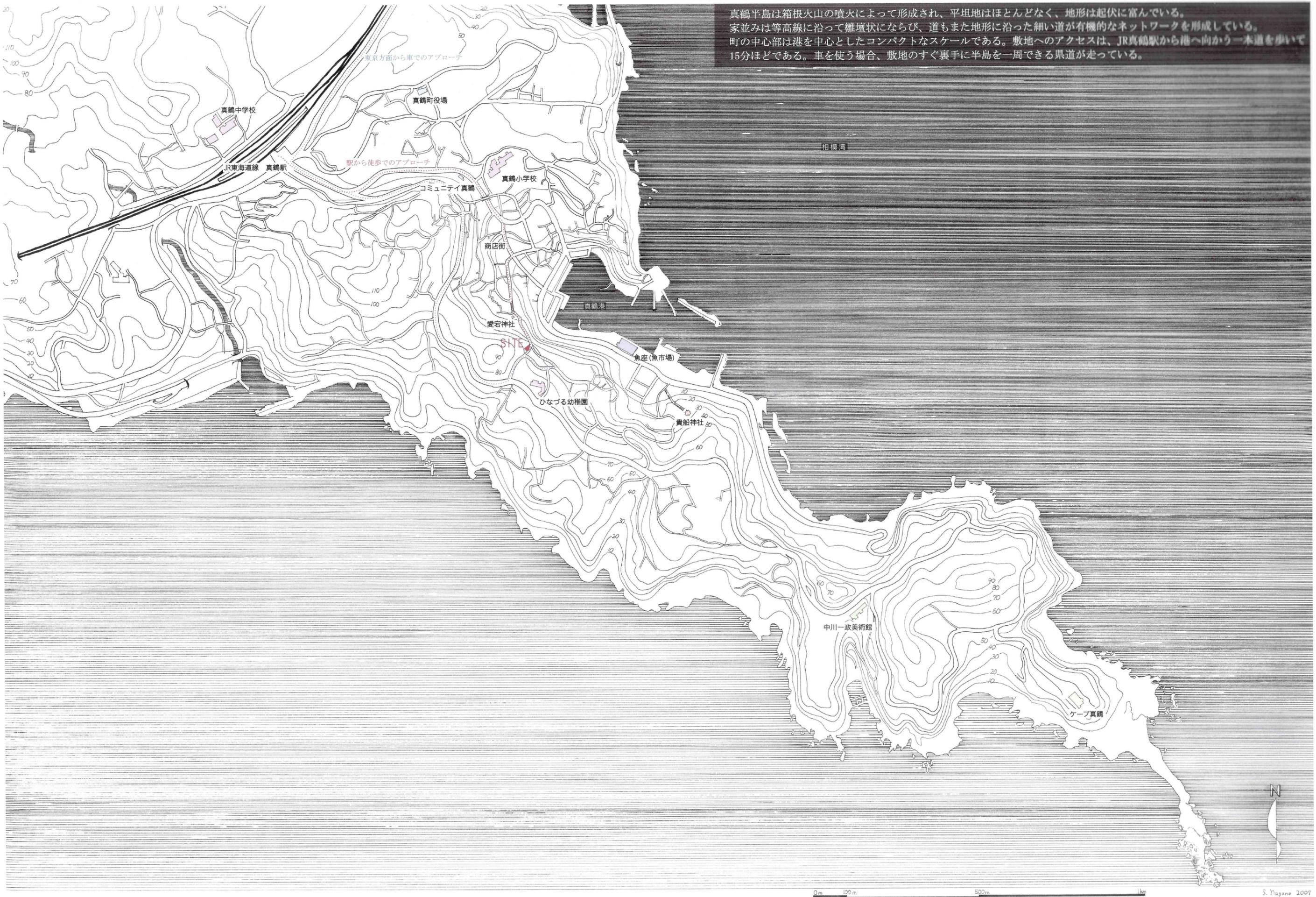
各階求積図 1/200

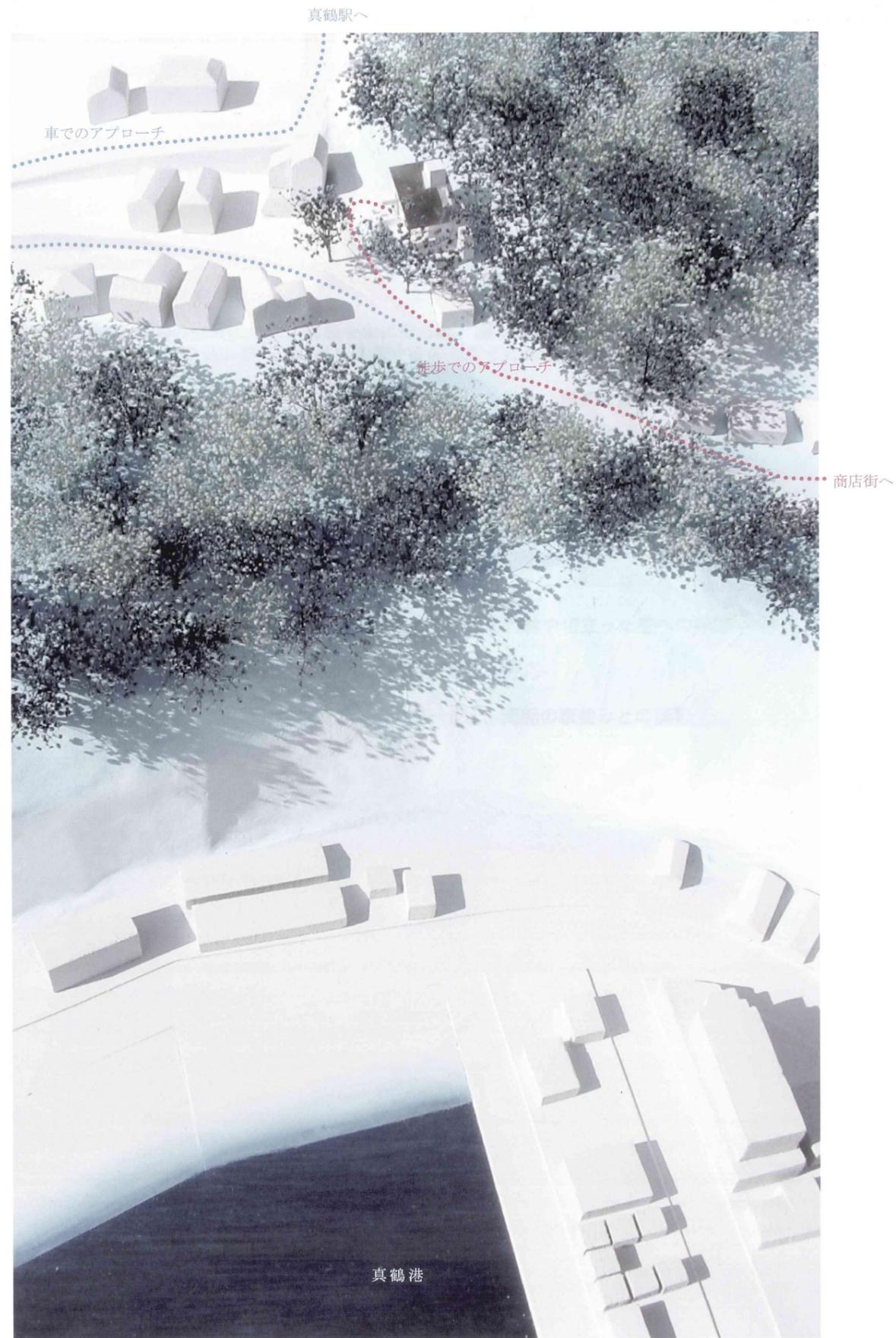


面積表

床面積の算定 (㎡)			
地階	アトリエ	$2.7 \times (1.4 + 2.7) + 4.05 \times 2.4 - 0.45 \times 5.1$	18.495
	シアター	$2.2 \times 3.41$	7.502
	浴室・洗面	$4.05 \times 2.1$	8.505
	倉庫	$4.05 \times 2.7$	10.935
	機械室	$0.9 \times 2.7 + 3.6 \times 1.09 + 1.4 \times 3.41$	11.128
1階	居間	$5.4 \times 3.1 + 2.7 \times 4.5 + 2.2 \times 1.4$	31.970
	台所	$2.7 \times 4.1$	11.070
	寝室	$5.4 \times 2.7$	14.580
	玄関	$1.85 \times 1.4$	2.590
	トイレ	$1.35 \times 1.4$	1.890
2階	主寝室	$4.05 \times 2.7$	10.935
	ブリッジ	$1.35 \times 2.4$	3.240
	書斎	$2.82 \times 2.1$	5.922
	ロフト	$2.2 \times 1.4$	3.080
建築面積の算定		1階床面積+軒庇 { (2.0-1.0) × 8.0 } + 2階テラス { (2.4-1.0) × 3.0 } = 74.3 ゆえに建築面積：74.3㎡	

真鶴半島は箱根火山の噴火によって形成され、平坦地はほとんどなく、地形は起伏に富んでいる。家並みは等高線に沿って雑壇状にならび、道もまた地形に沿った細い道が有機的なネットワークを形成している。町の中心部は港を中心としたコンパクトなスケールである。敷地へのアクセスは、JR真鶴駅から港へ向かう一本道を歩いて15分ほどである。車を使う場合、敷地のすぐ裏手に半島を一周できる県道が走っている。





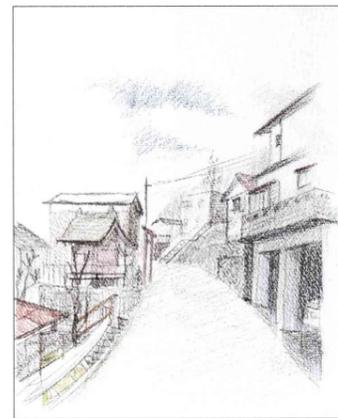
4

階段を上りきると、さらに急勾配の坂道が続く。ここま  
でくると民家はややまばらになってくる。目指す家はす  
ぐそこである。



3

長い階段の上に見える小さな屋根は愛宕神社である。  
壇状の石垣もまた固有の風景をつくっている。



2

道沿いに小さな稲荷が祀られている。このような特徴的  
な風景は目指す家へ行く目印になる。



1

町の中心部、等高線に沿った道を歩いていると、家々の  
間から港が顔をのぞかせる。この道には道祖神も住んで  
いる。

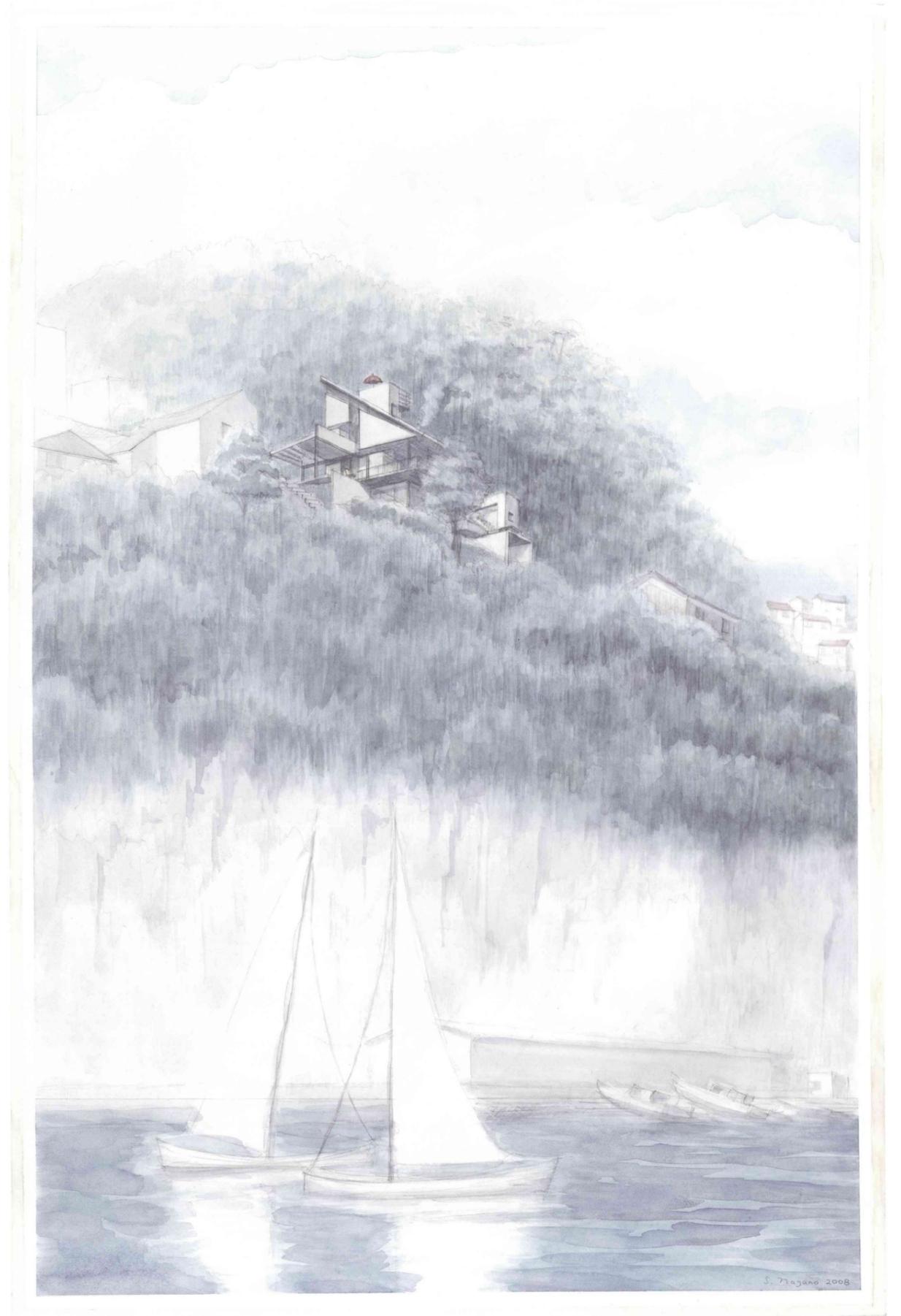
町の中心部から敷地へのシーケンス

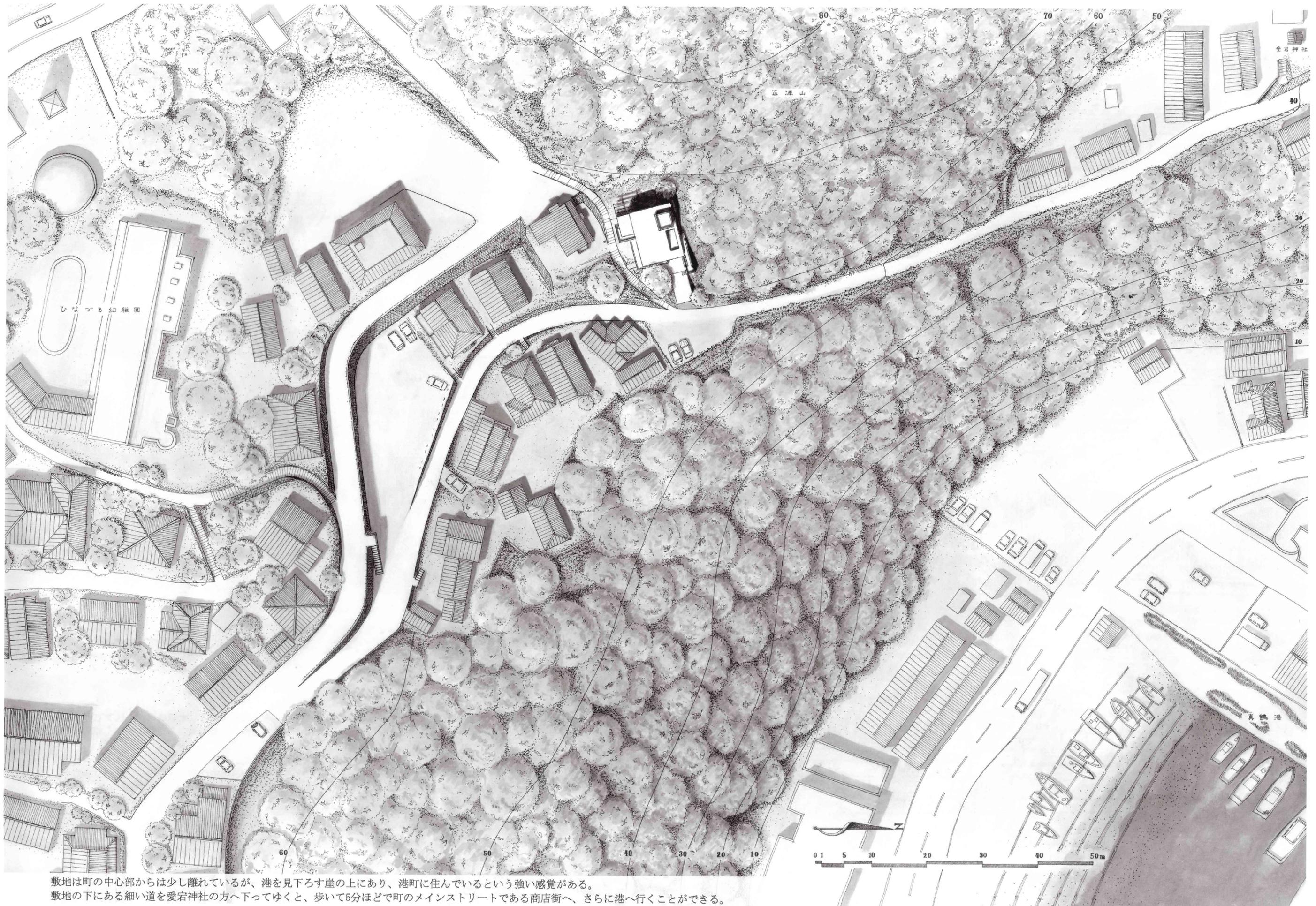
敷地は海拔60~70mの位置にあり、背後を山に守られ、眼下には切立った崖がある。そして大きく海への眺望がひらけ、港を見渡すその向こうに相模湾や遠く太平洋を望む。

周囲の力強い風景に呼応しながら、過剰な造形の饒舌さを抑え、風景を変えるのではなく、風景の中に在ることを目指している。

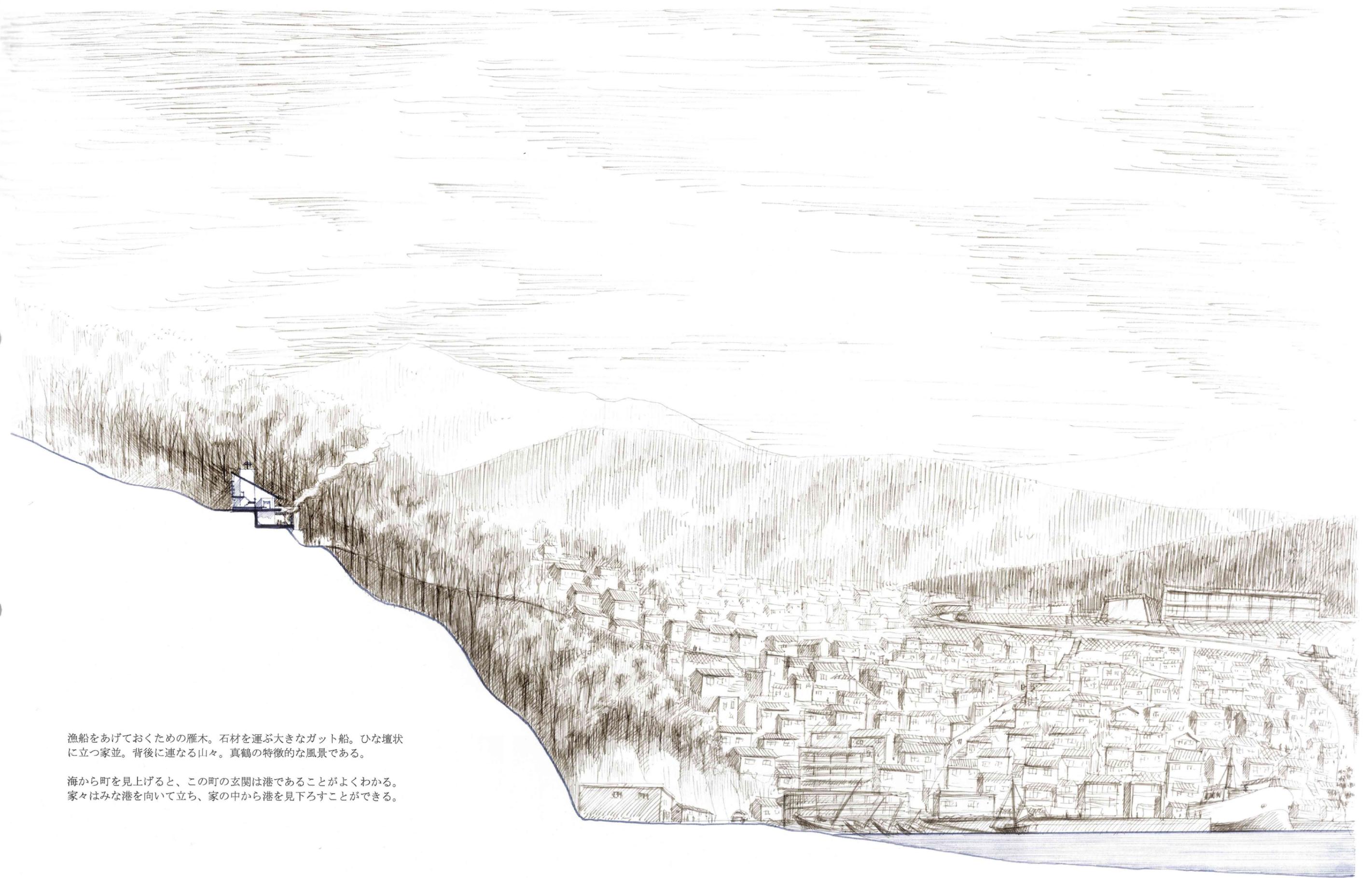
そのため、以下の3つの要素を基本として外観を構成する。

- ・ボックスと細い鉄骨柱の垂直線……背後にある正源山の竹林や切立った崖への呼応
- ・積層する床面の水平線……眼下に広がる海の水平線への呼応
- ・屋根の斜めの線……土地の勾配や海風へのオマージュ、周囲の家並みとの調和



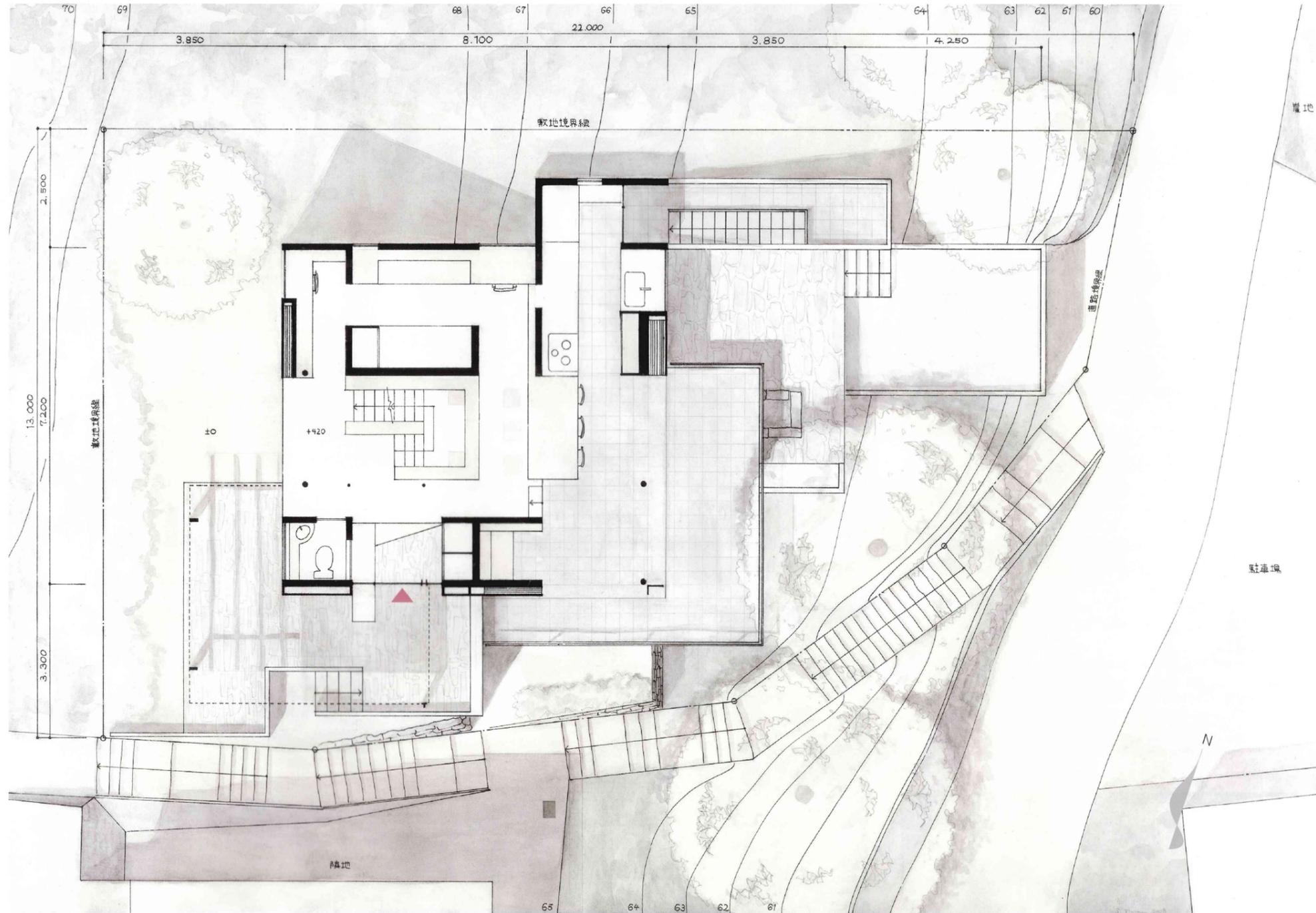


敷地は町の中心部からは少し離れているが、港を見下ろす崖の上であり、港町に住んでいるという強い感覚がある。  
 敷地の下にある細い道を愛宕神社の方へ下ってゆくと、歩いて5分ほどで町のメインストリートである商店街へ、さらに港へ行くことができる。



漁船をあげておくための雁木。石材を運ぶ大きなガット船。ひな壇状に立つ家並。背後に連なる山々。真鶴の特徴的な風景である。

海から町を見上げると、この町の玄関は港であることがよくわかる。家々はみな港を向いて立ち、家の中から港を見下ろすことができる。



### 敷地について

真鶴半島は地形の起伏の多い土地であるが、この敷地も上下で最大約10mの高低差がある。西から北にかけて正源山がそびえ、ちょうどその懐に守られるようにして敷地がある。敷地の端には大きな椎の木が立ち、風景の目印になっている。

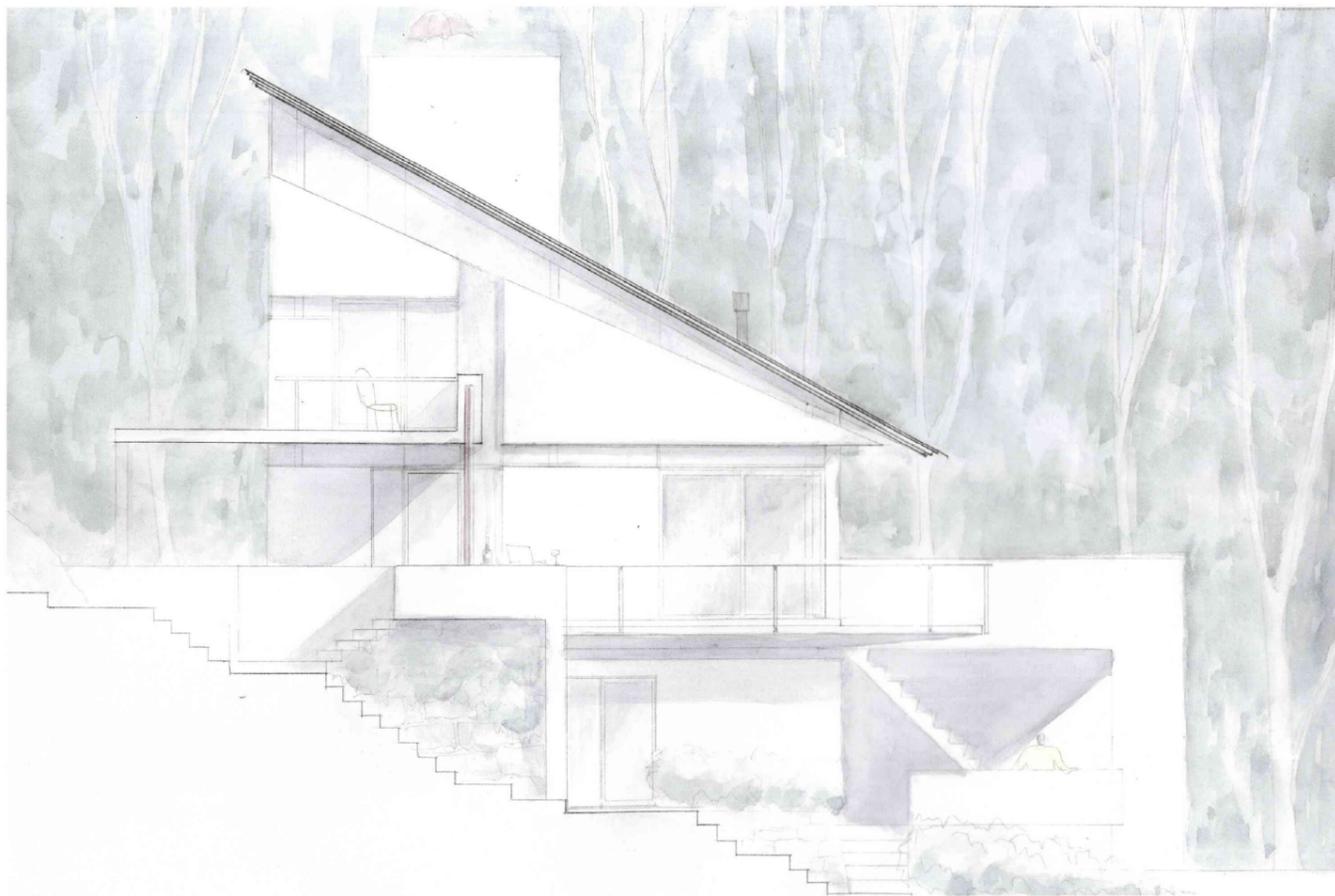
敷地は東に向かって下り、下端で幅員約3mの道に接している。その直下に港へと向かって急激な崖が落ちこんでいるため、道路の拡幅は難しい。また、この道は利用者が多くはないので、避難上は支障のないものと考えられる。むしろ、この「細く曲がりくねった道」こそが、真鶴に固有の風景を生み出しているのである。

敷地の南側には、この家へのアプローチとなる石段がめぐっている。石段もまた地形に沿って曲がりくねり、踏面もまちまちである。訪れる人は家を見上げながらこの石段をのぼってゆくのだが、歩をすすめるにつれて家の表情は刻々と変化する。

このアプローチはそれ自身非常に魅力的である。そのため、敷地の境界には建築的な操作は控え、代わりに石垣や外構をととのえることにした。石垣の隙間に咲く小さな花々の住処を奪うことは、どうしてもはばかられたためである。



敷地へのアプローチ



南立面図



東立面図



北立面図



西立面図



## 空間の構成方法について

空間を人間の身体的なスケールに分節するため、次の3つの要素を用いる。

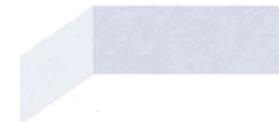
## 1. 積層する床面



## 2. ボックス



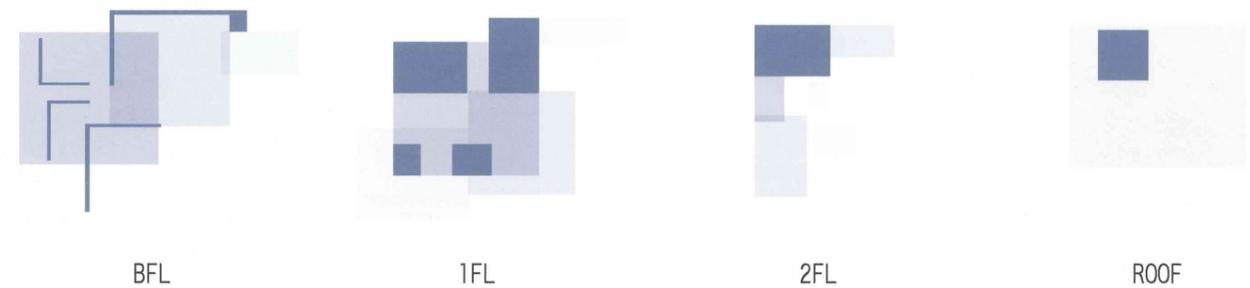
## 3. L型の壁



これらの限られた要素を用いて、7.2m×8.1mの平面の中にさまざまなニュアンスを持った特徴的な「居場所」を構成する。

そして、これらの特徴的な「居場所」が、シェルターとしての一枚の大きな屋根の下に集まっているということが空間のコンセプトである。

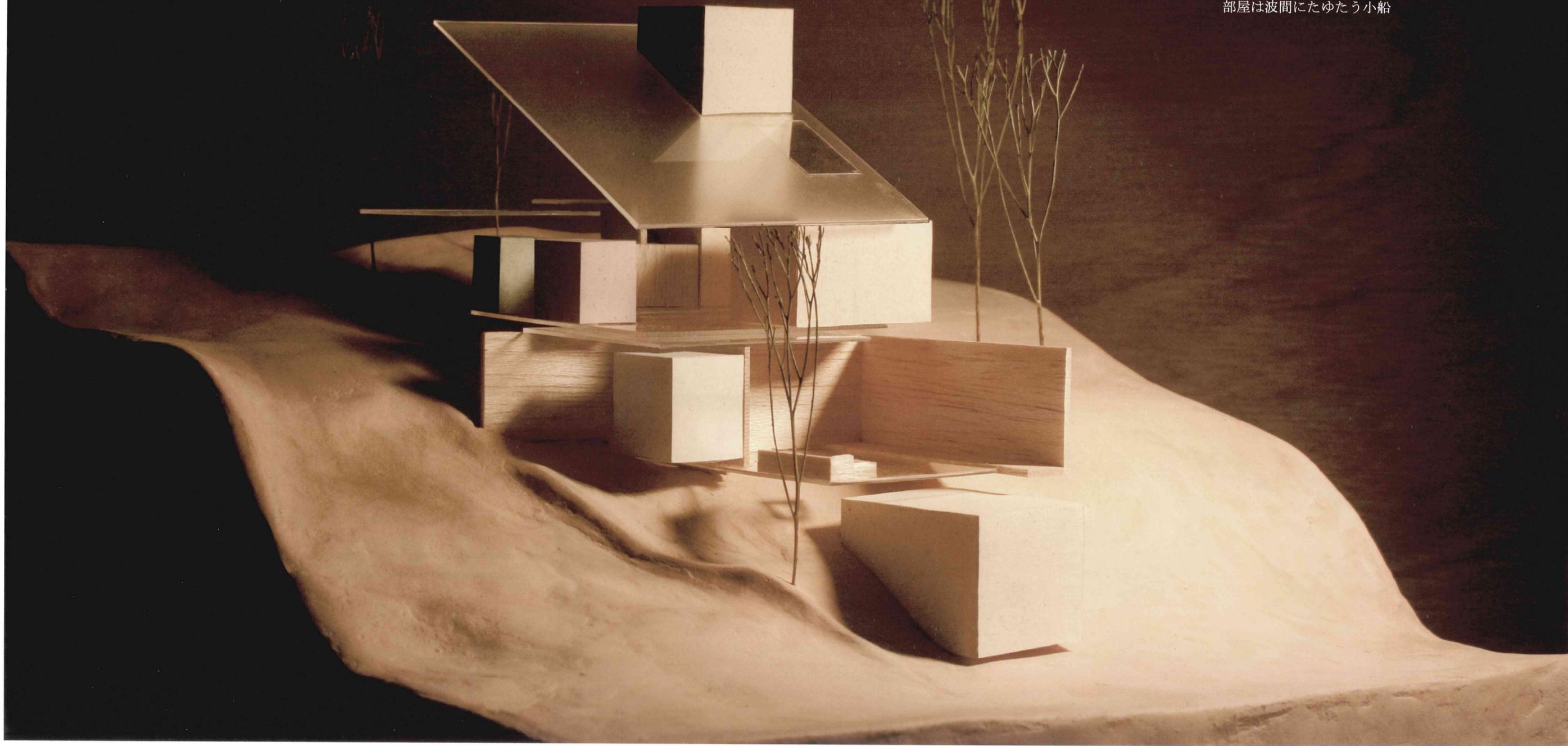
複数の床面は少しずつずれながら積層し、L型の壁も雁行することで空間に連続性と領域を生み出す。床面の上に置かれたさまざまな大きさのボックスはそれ自身がひとつのルームであり、同時にボックスとボックスの間の空間もまたルームとなる。

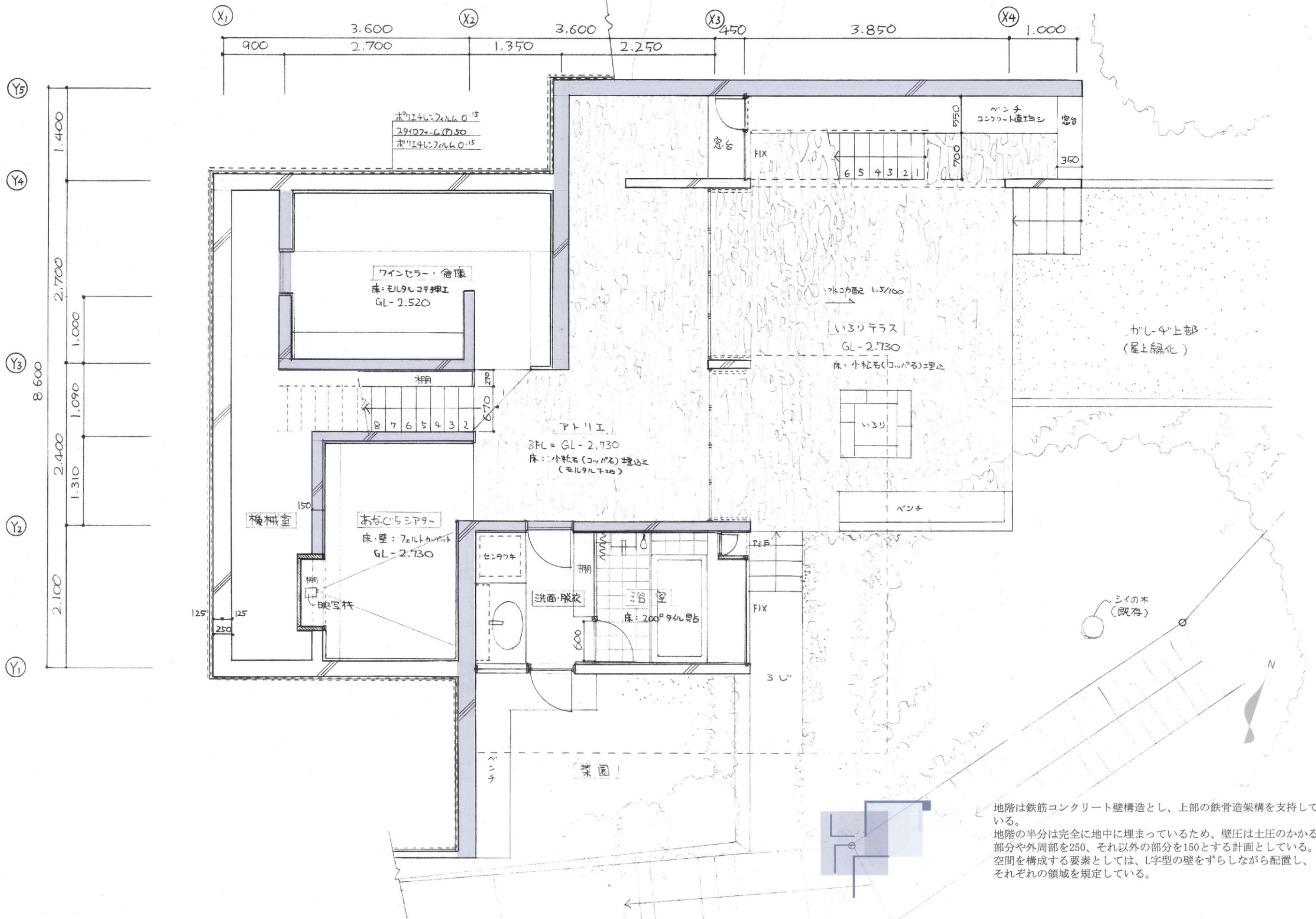


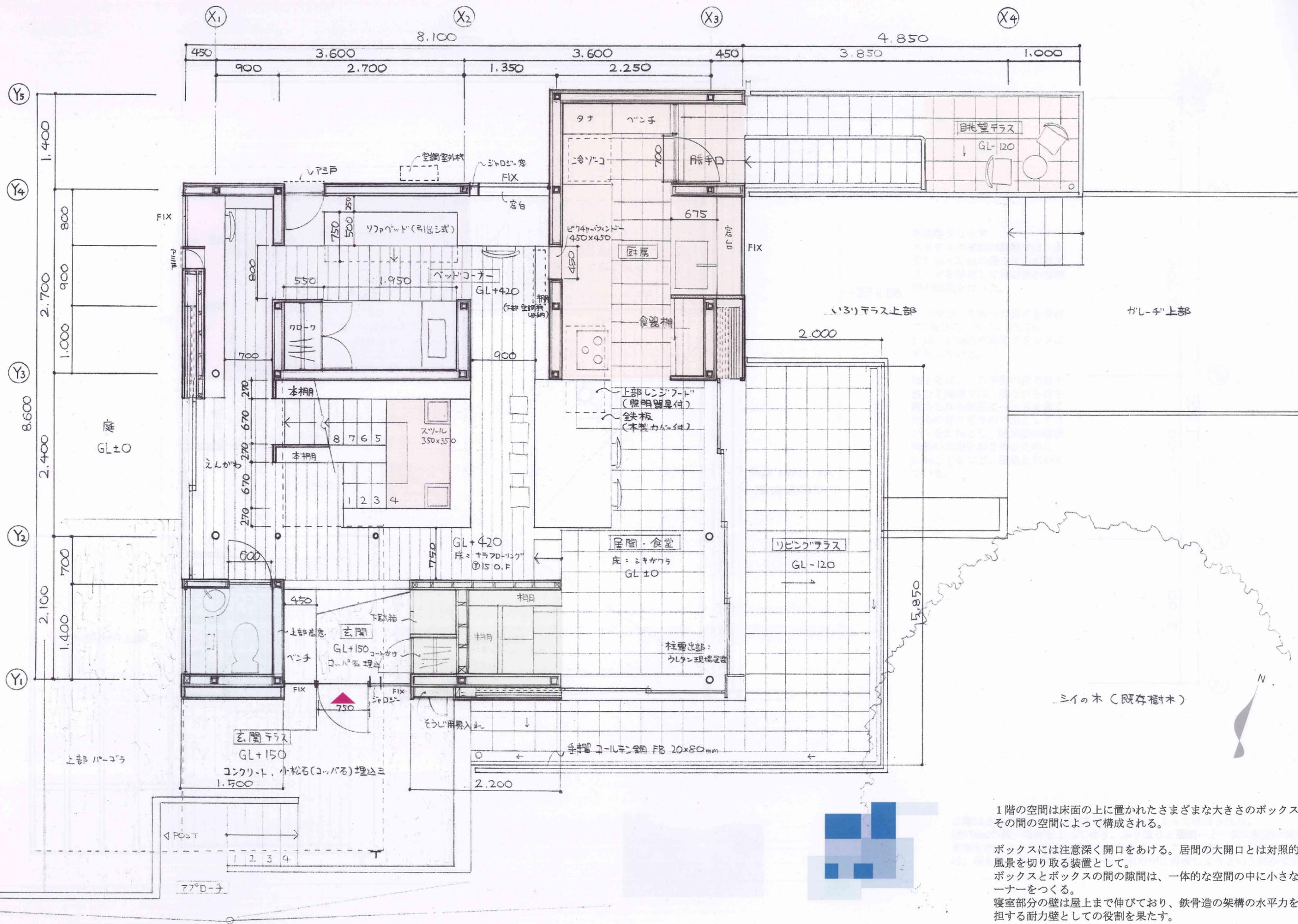
個々の「居場所」が集まって関係づけられ、ネットワークを生成することによって、ひとつの「家」をかたちづくる。

一枚の大屋根の下に、性格を持ったさまざまな  
ルームや床のレベル差があるということは、空  
と海との間に大地や家々、人々や生き物たちの  
生活があるということの縮図である。

私の家の屋根は空  
床は海  
部屋は波間にたゆたう小船



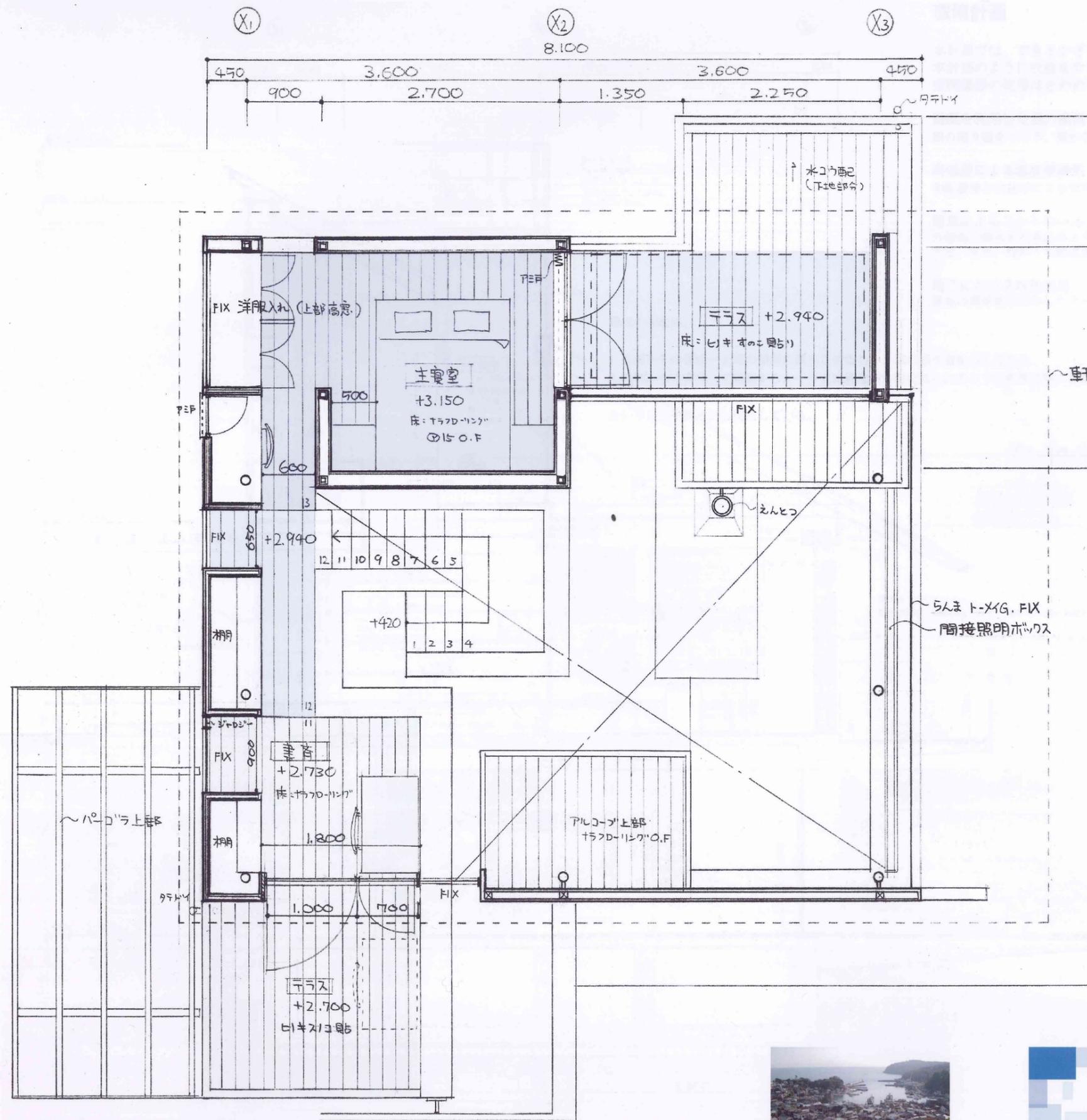




1階の空間は床面の上に置かれたさまざまな大きさのボックスとその間の空間によって構成される。

ボックスには注意深く開口をあける。居間の大開口とは対照的に風景を切り取る装置として。ボックスとボックスの間の隙間は、一体的な空間の中に小さなコーナーをつくる。

寝室部分の壁は屋上まで伸びており、鉄骨造の架構の水平力を負担する耐力壁としての役割を果たす。



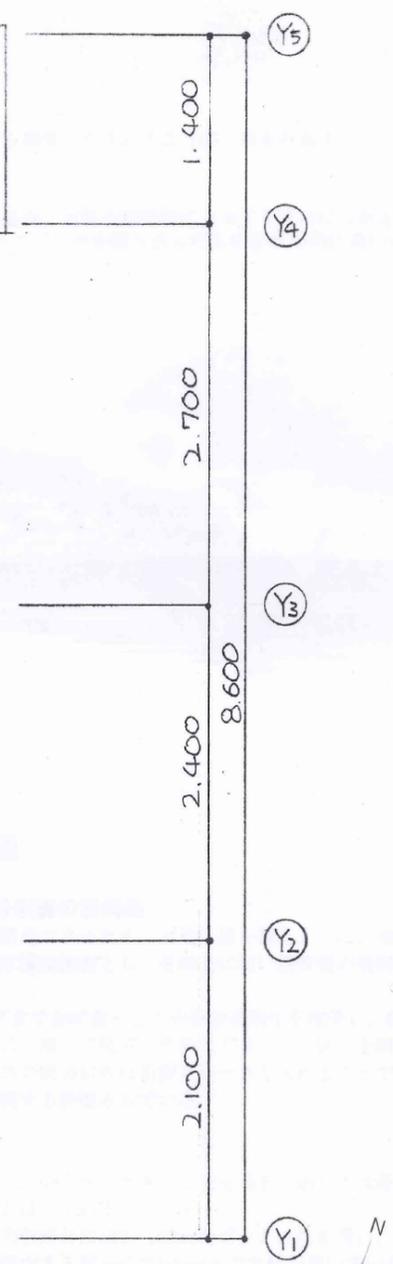
不均等グリッド  
 スタディの初期の段階では、まず2.4m×3.6mの長方形の均等グリッドを設定しておおまかな空間の配置を行った。

その後で、各部分の要求を受けてY軸方向のスパンを2.7m、2.4m、2.1mの不均等グリッドにずらしている。

たとえば、コの字型の耐力壁を含む主寝室では、寝ながら海を眺められる位置にベッドを置くためのぎりぎりの寸法としてスパンを2.7mとし、階段室は階段両脇の本棚をおさめるために2.4mとするなど、融通を利かせている。

～車庫先端

～ランマト-XIG, FIX  
 間接照明ボックス



2階はさまざまなレベル差を持った床面によって構成される。幅670mmの狭い階段を上ってゆき、ふり返ると居間へと一気に眺望が開け、居間を囲むように壇状に構成された各スペースを見渡すことができる。これは、港を囲む真鶴の町並みを一軒の家の中に再現しようという試みである。

## 環境計画

本計画では、できるかぎり空調機器に頼らずに、自然環境の力を借りて冷暖房を行うことを考える。本計画のように吹抜を介して室内が連続した一体の空間となっているような場合、空気を隅々まで暖めたり冷めたりする空調機器の使用はきわめて効率が悪い。そこで、人がいる所だけを局部的にコントロールする。

### 海風を利用した風力換気

風の通り道をつくり、海から吹き上げる風を取り入れる。

### 高低差による温度差換気

勾配屋根と吹抜けによる天井高の高低差を利用し、気圧差により無風状態でも換気がなされるよう開口部を計画する。

### 建具によるコントロール

外壁面の建具を引き込みとするほか、補助梁内部にロールスクリーンを組み込み、天候や時間帯によってこまめに日射をコントロールする。また、柱のうち鉛直加重のみを支える部分には、2枚の鉄板の間にジャロジー窓を組み込んだものを補助的に用いる。

### 地下における地熱利用

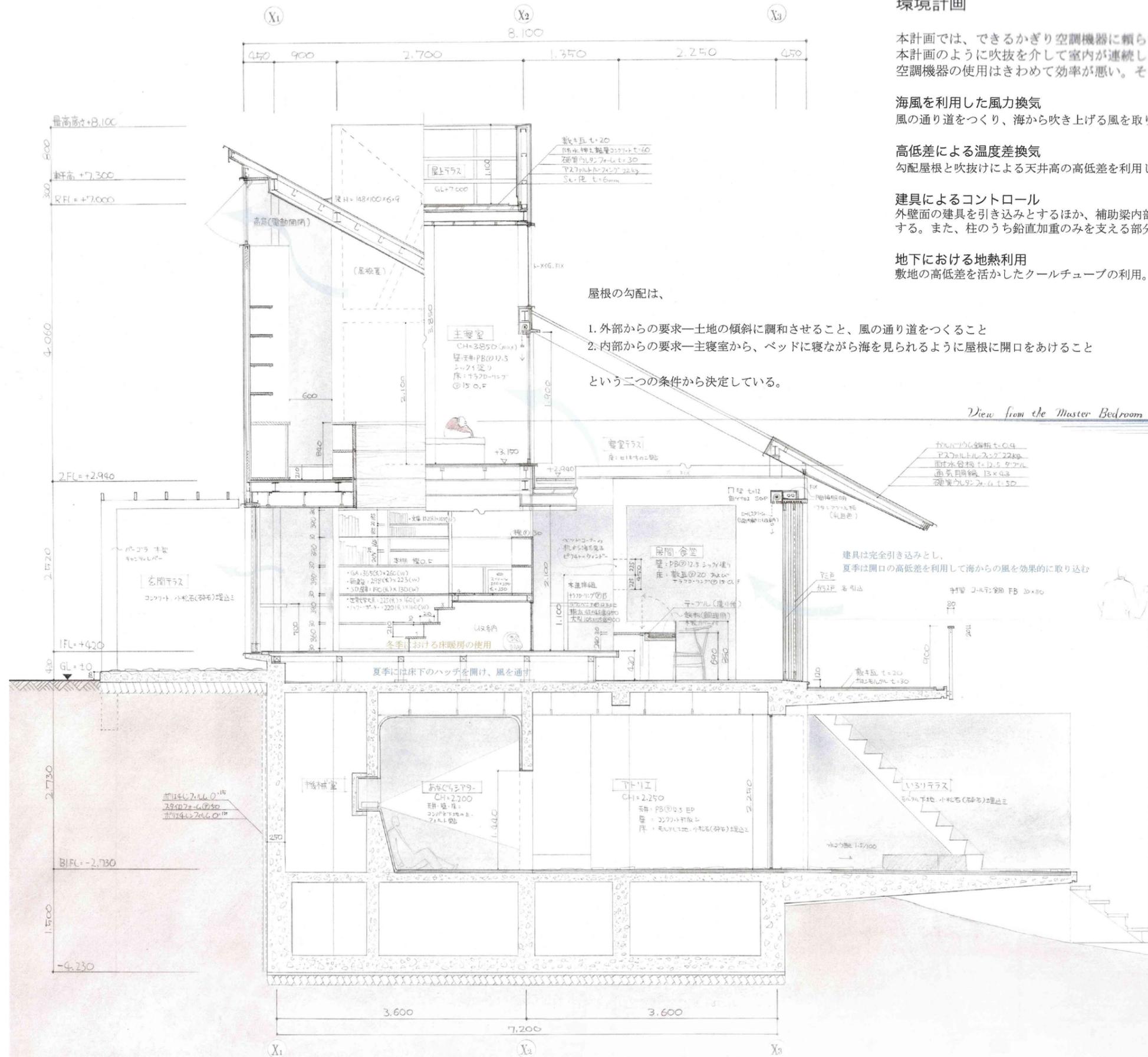
敷地の高低差を活かしたクールチューブの利用。

屋根の勾配は、

1. 外部からの要求—土地の傾斜に調和させること、風の通り道をつくること
2. 内部からの要求—主寝室から、ベッドに寝ながら海を見られるように屋根に開口をあけること

という二つの条件から決定している。

View from the Master Bedroom ...



## 構造計画

### RC造と鉄骨架構の混構造

急勾配の傾斜地であるため、大地に根を張るように、地面に接する部分をRC造壁構造とし、その上に軽い鉄骨造の架構を乗せている。

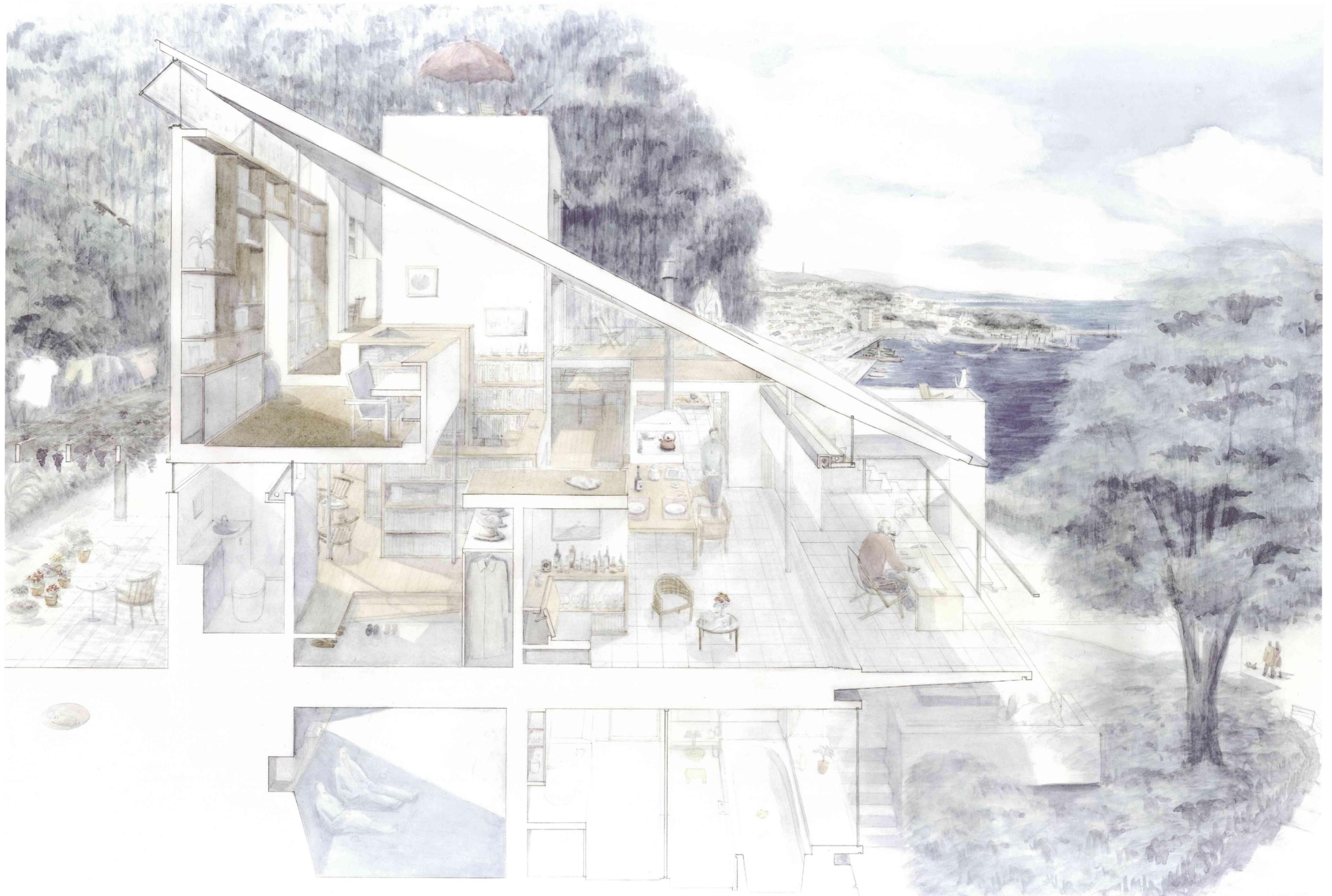
1階床スラブまでをRC造として十分な面剛性を確保し、鉄骨架構の屋根には、海への眺望のためにどうしても開口を開けたい主寝室テラスの部分以外は引張ブレースを入れることで必要な面剛性を確保する計画としている。

### スパン

主なスパンは3.6mだが、大きな吹抜を通るX2通りでは最大4.5mのスパンをとばしている。

鉄骨柱は耐力壁部分に100×100mmのボックス柱を用い、意匠上室内に柱の露出する部分には100mmφの丸柱を用いている。

梁はH=148×100×6×9mmのH型鋼を基準としているが、居間の一部では、ロールスクリーンを内蔵するI型梁を補助的に用いている。

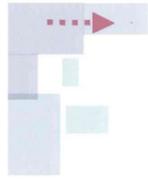


一日の時間の流れ。やわらかな陽射し。家の中やテラスを吹きぬけるそよ風。食事の時間。……

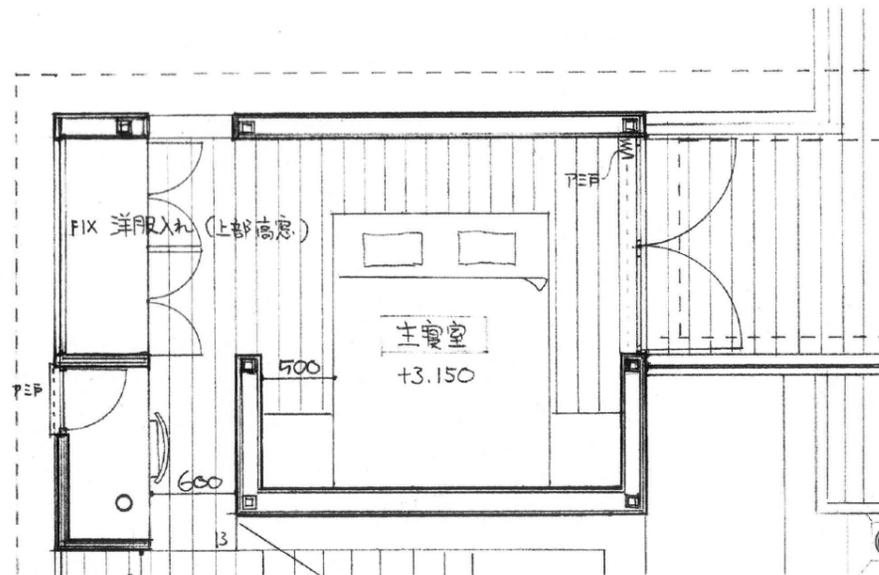
生活にはさまざまな場面があり、その時々に応じて人は居心地のよい居場所を選んですごしている。

そのようなさまざまな暮らしの場面の中で、家にいながら「真鶴」という町を感じられるような空間の作り方をめざした。家の中にも「真鶴」があるのである。





2FL

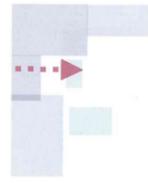


主寝室部分平面 1/50

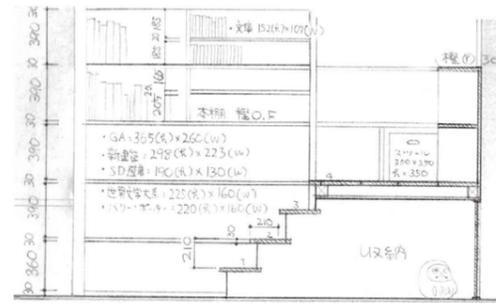
### 主寝室

ベッドに寝ながら海を見る。  
朝の目覚めは波の音。  
夜の波は子守唄。





2FL



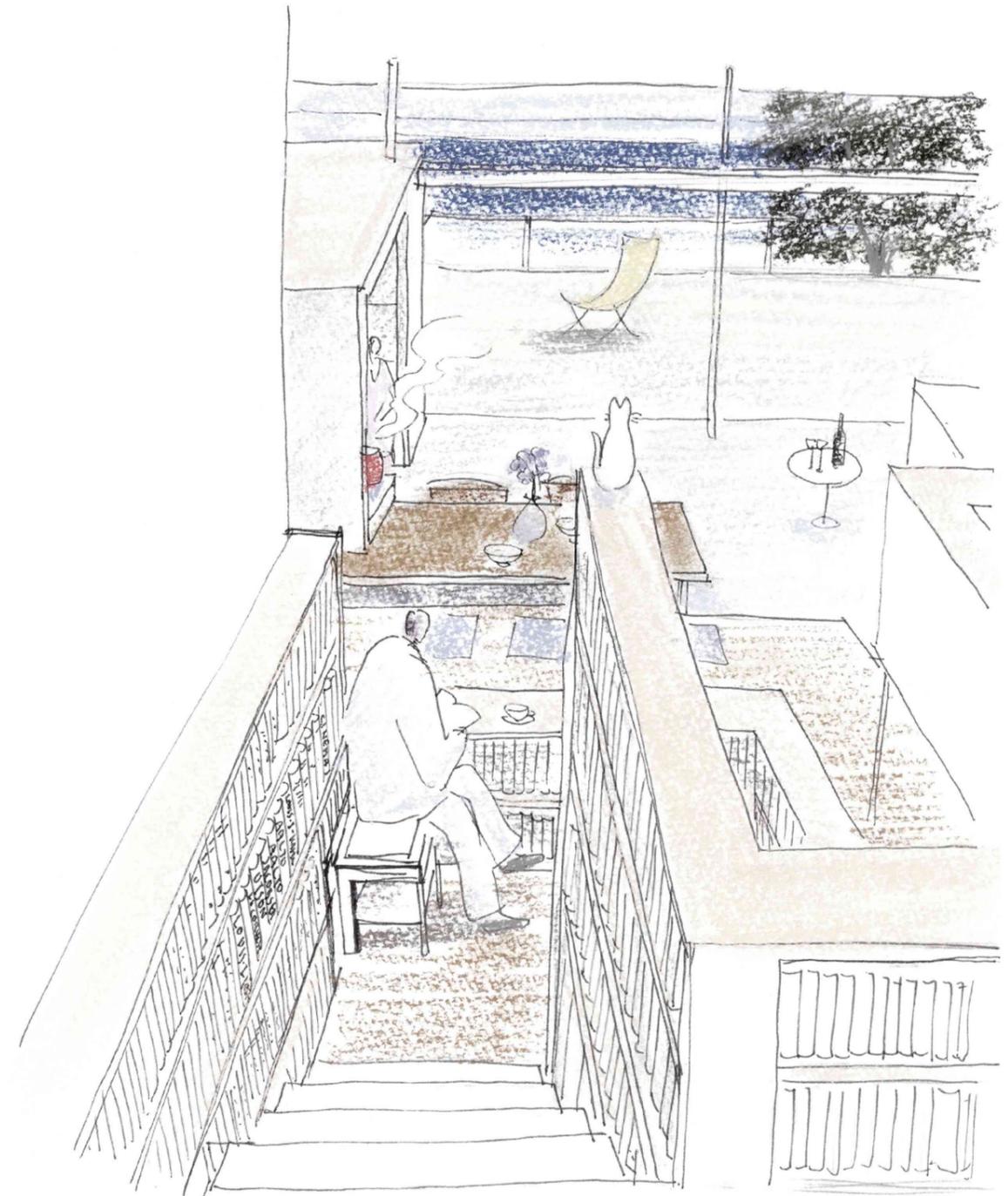
階段部分断面 1/50

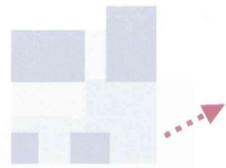


### 踊り場図書室

本棚に囲まれたせまい階段を上ると、ぱっと視界が開け、居間への眺望が開ける。これは、真鶴に数多くある石段の空間を変容し、家の中に形を変えて再現したものである。

踊り場の椅子に座って本棚から好きな本を取り出し、ページを繰っていると、キッチンからはおいしそうなおいがのぼってくる。





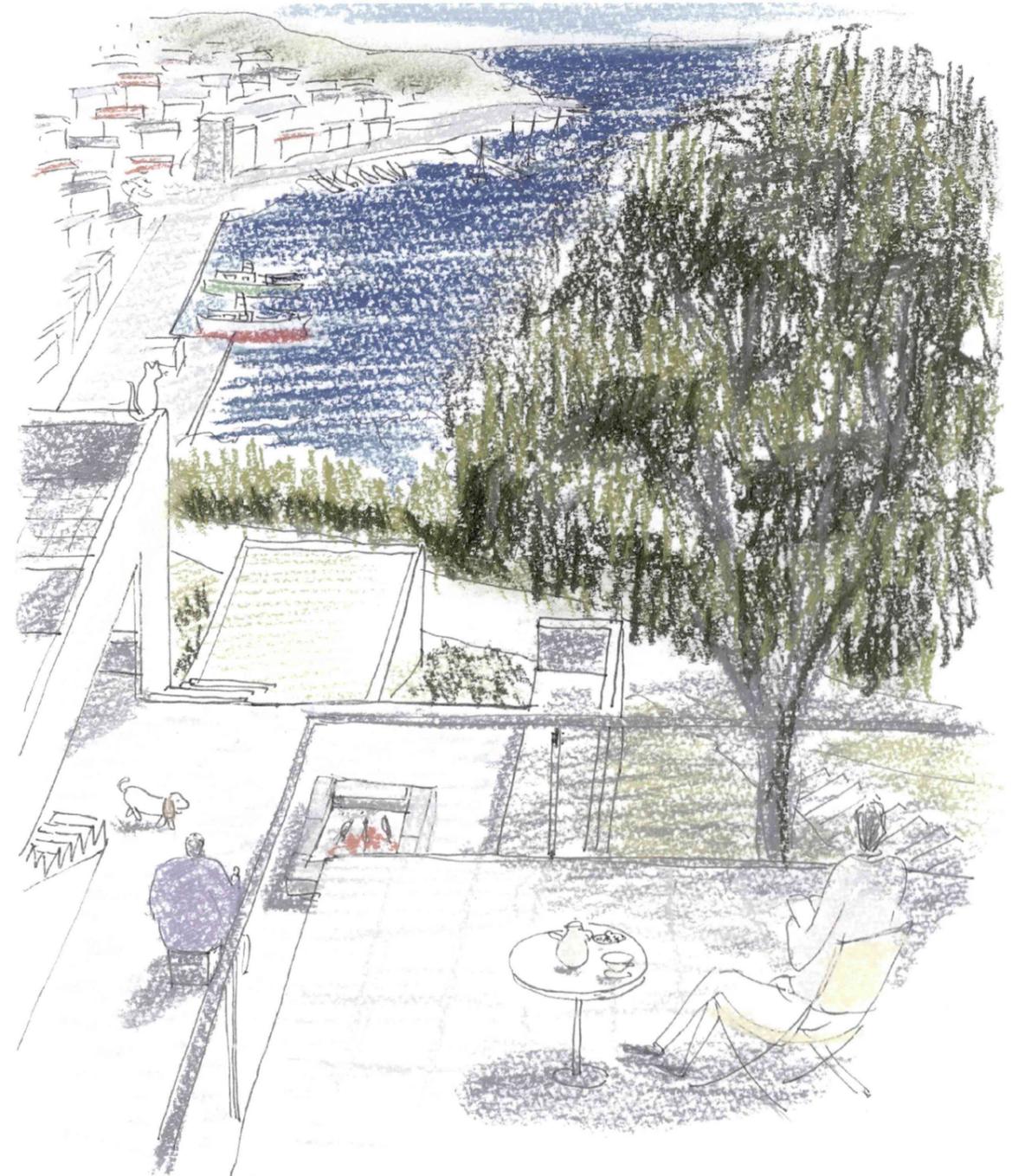
1FL

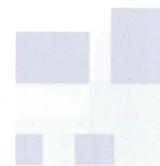


### リビングテラス

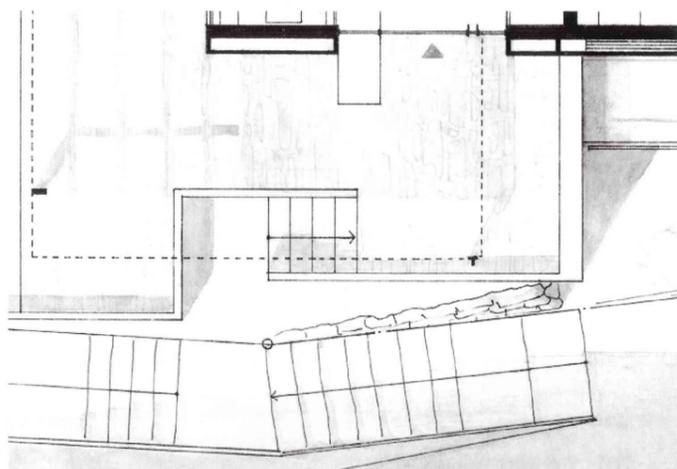
テラスに出て港を見下ろす。  
大きな椎の木の下にそっと差し出されるように積層する何枚ものテラスは  
重なり合ってそのまま港へと降りてゆくかのようなようである。

これは、港を囲むようにひな壇状に立ち並ぶ家並の風景へのオマージュで  
ある





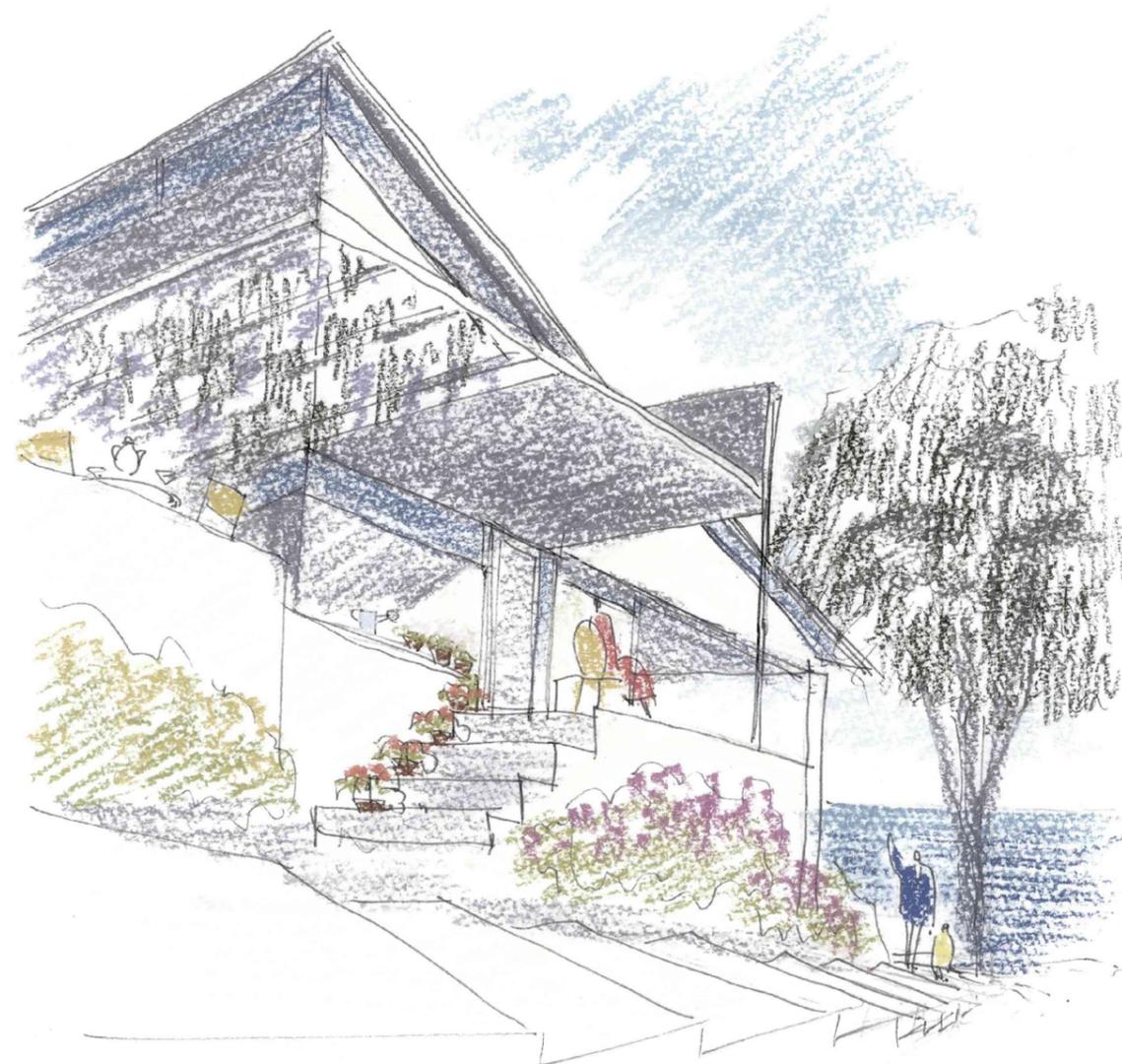
1FL

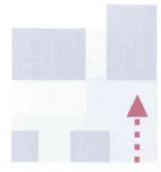


玄関先部分平面 1/80

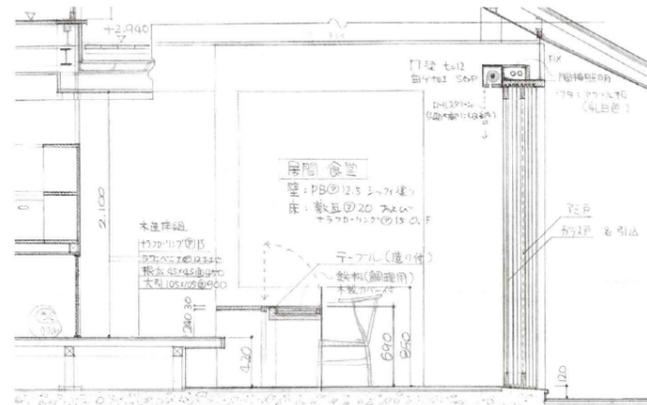
### 玄関先

アプローチの石段を折り返し、パーゴラの木陰を通してさらに数段登ると、視界は大きく海へと開ける。心地よい海風が通り過ぎてゆく。





1FL

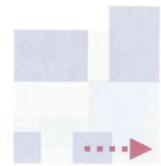


食堂部分断面 1/60

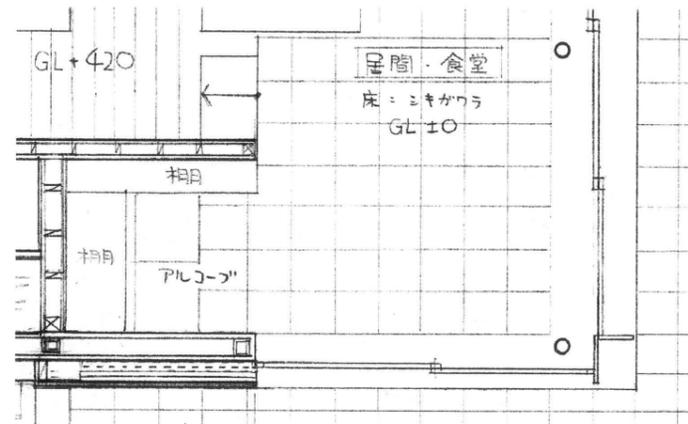
### 食卓

みんなでわいわい、食卓を囲む。  
今日はご主人が鉄板焼きを振舞ってくれます。





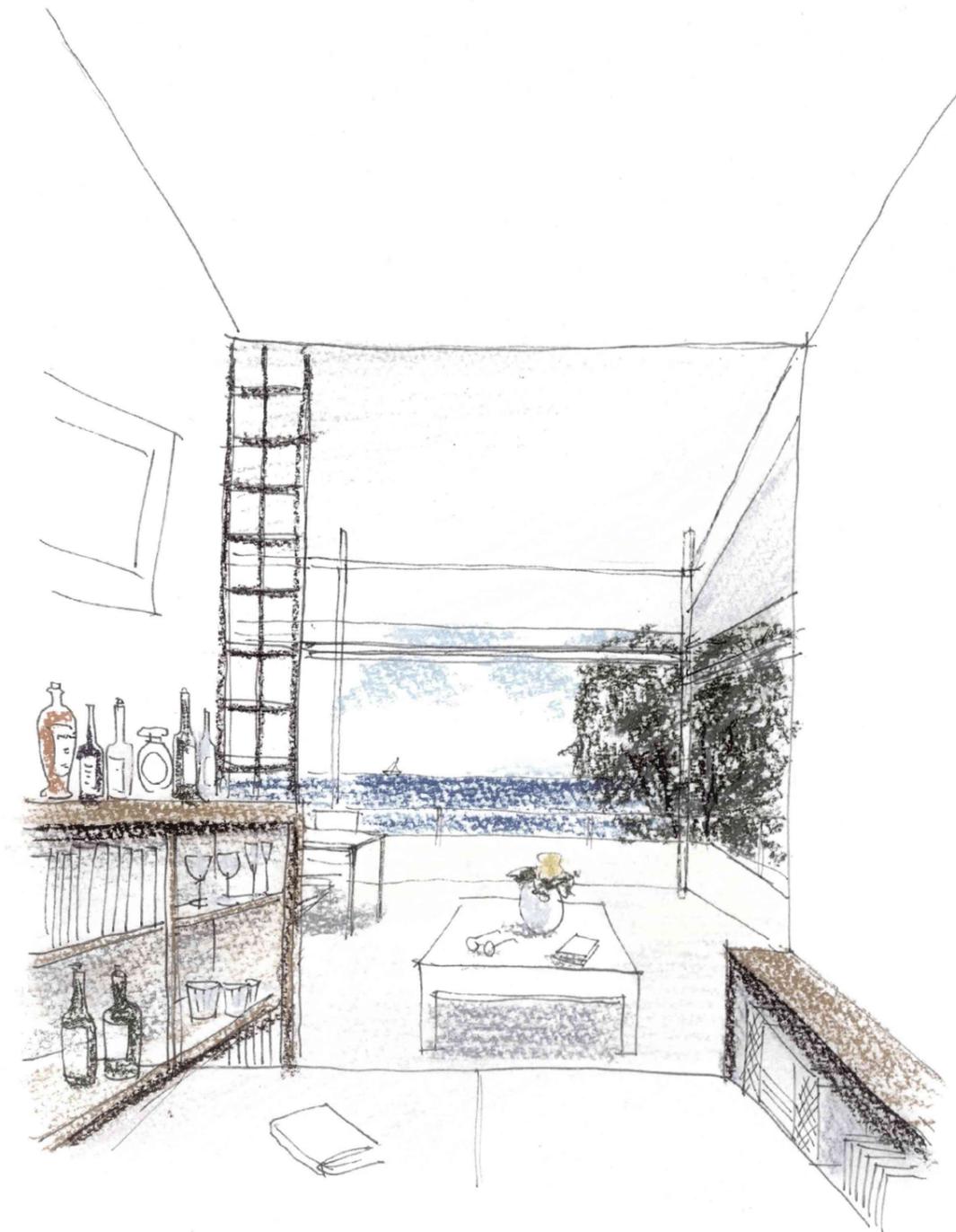
1FL

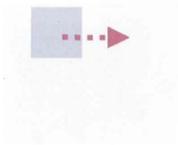


ニッチ部分平面 1/50

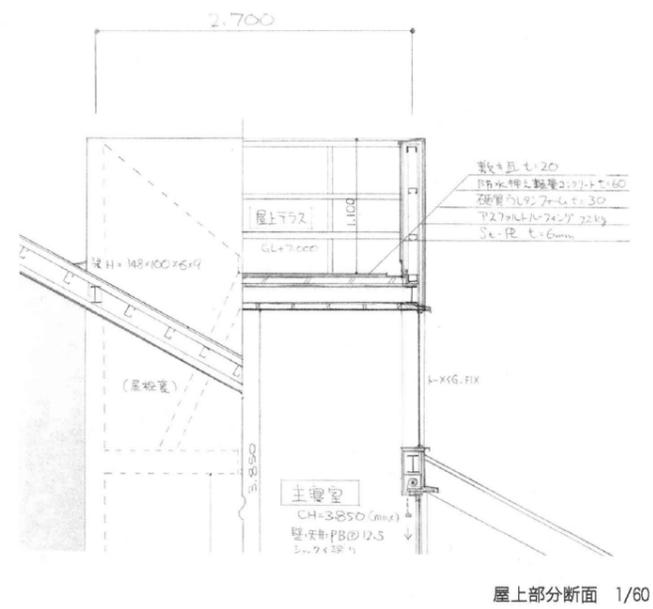
### リビングのニッチ

ちょっと隠れた部屋の片隅に  
囲まれた小さな小さな部屋。  
天井高は1,900に抑えられている。



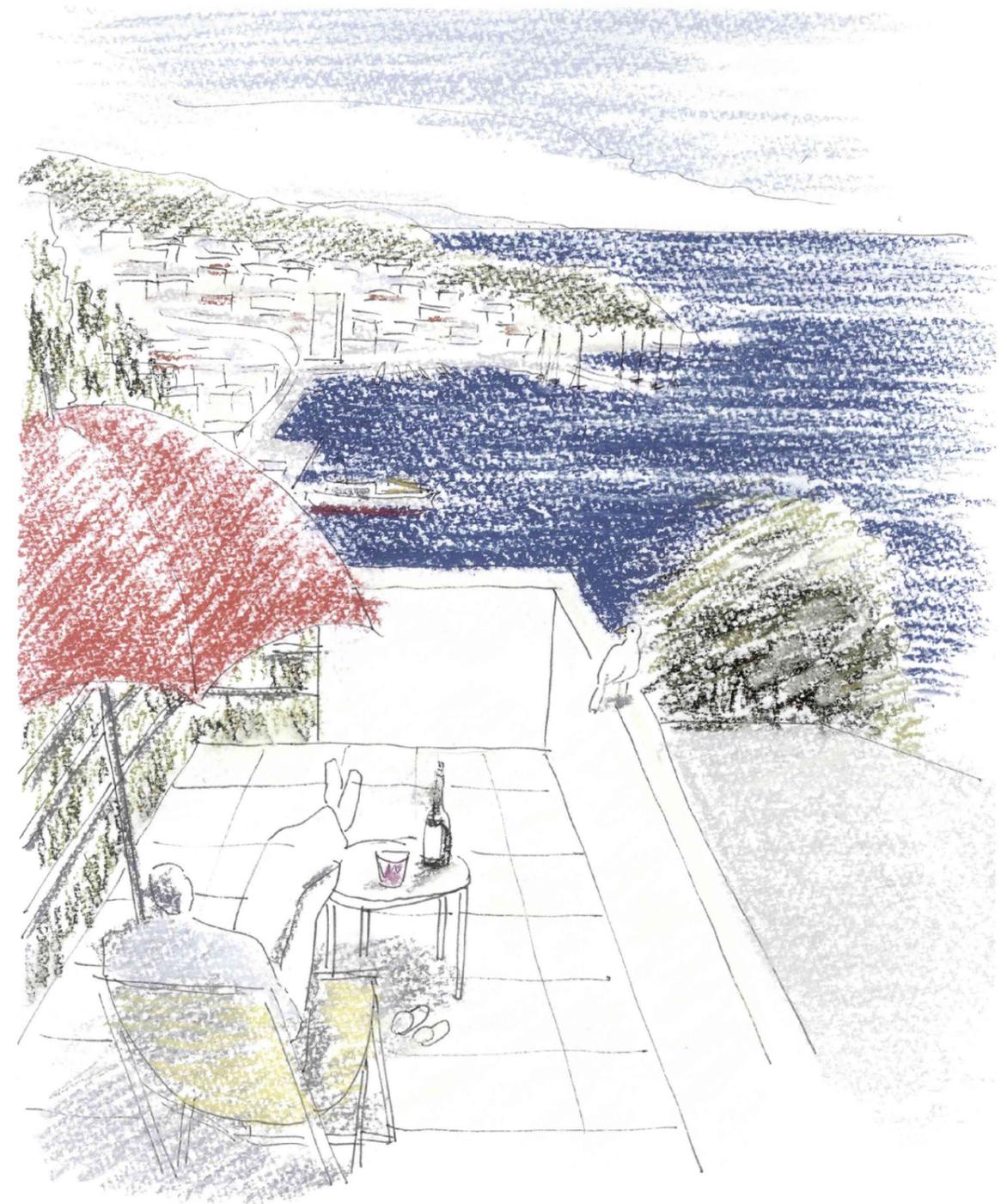


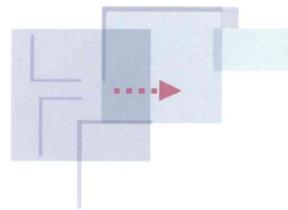
## ROOF



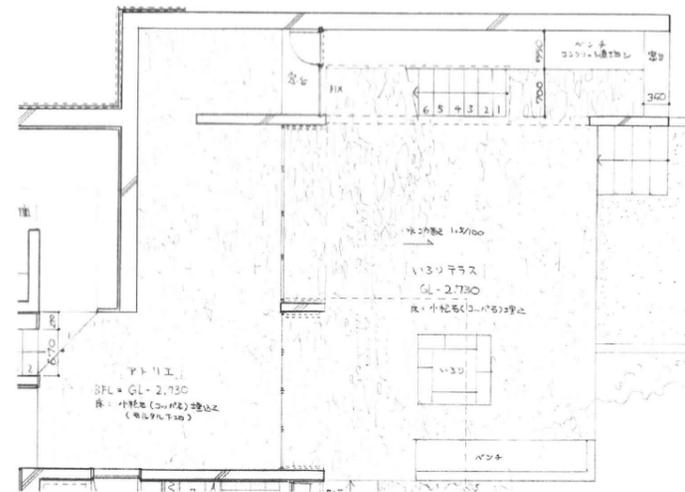
### 屋上テラス

主寝室上部の屋根裏からさらにはしごを上ると、屋上テラスに出る。  
港を見下ろし、はるかな相模湾を望む。  
家の中とは切り離された、非日常的な世界。  
私の家の屋根は空。

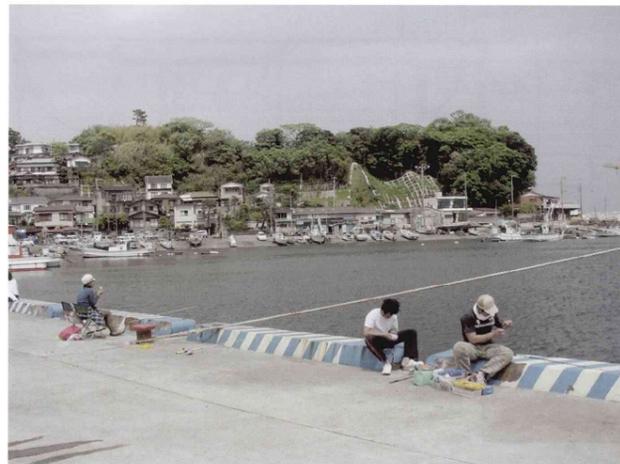




BFL



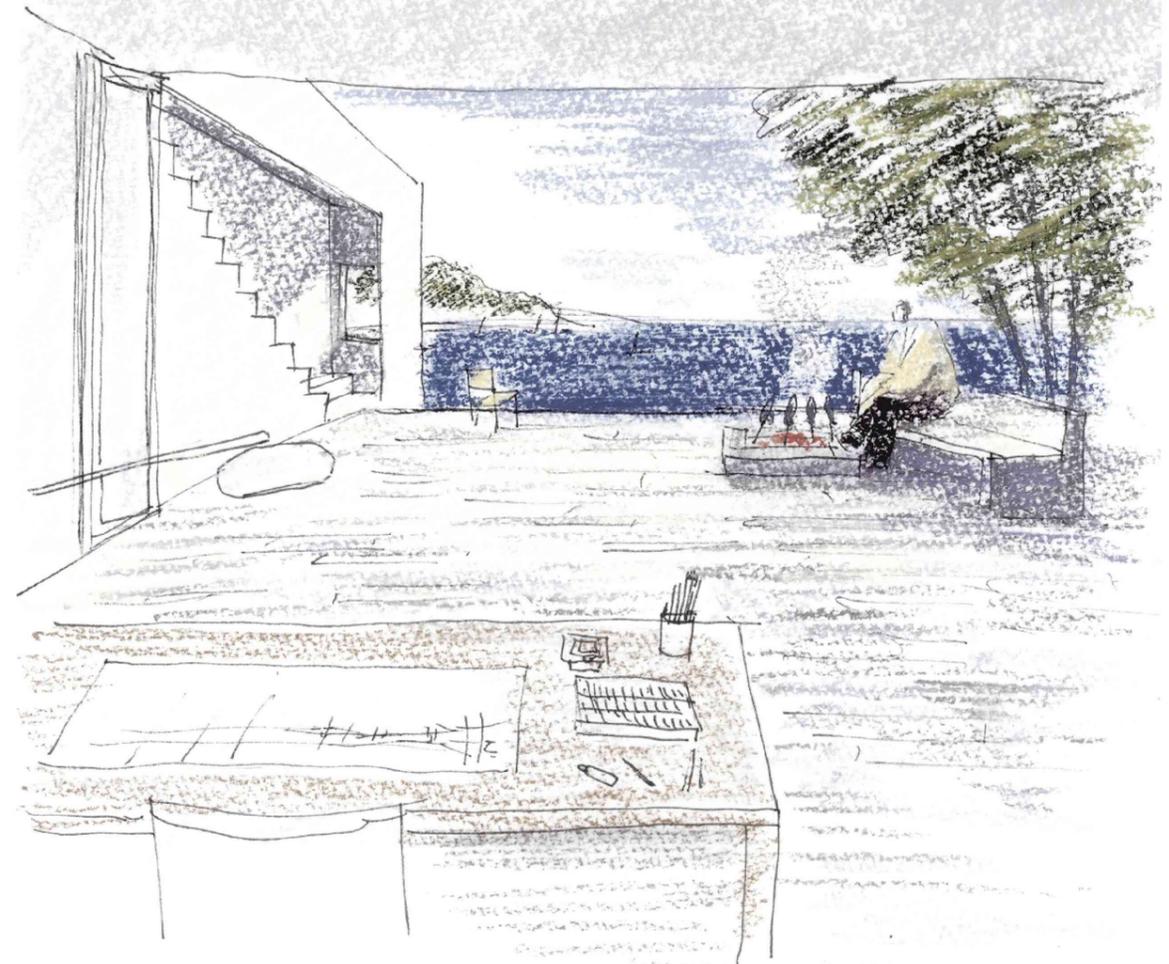
アトリエ部分平面 1/100

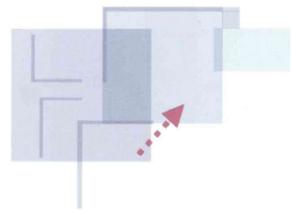


### アトリエ

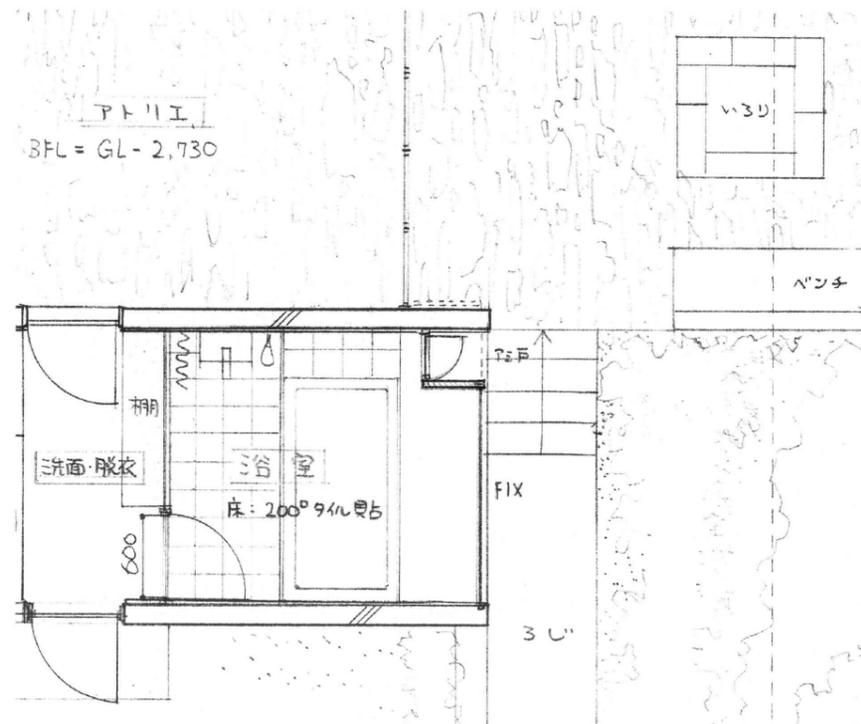
蛇腹戸を開け放てば地下のテラスと一体の大きな空間として使うことができる。床面は海の水平線へと連続してゆく。これは、港の物揚場に座って弁当を食べたり、釣りを楽しんだりしている光景に思いをはせて設計したものである。

床には小松石を加工するときに出る廃材である木端石を埋め込んでいる。





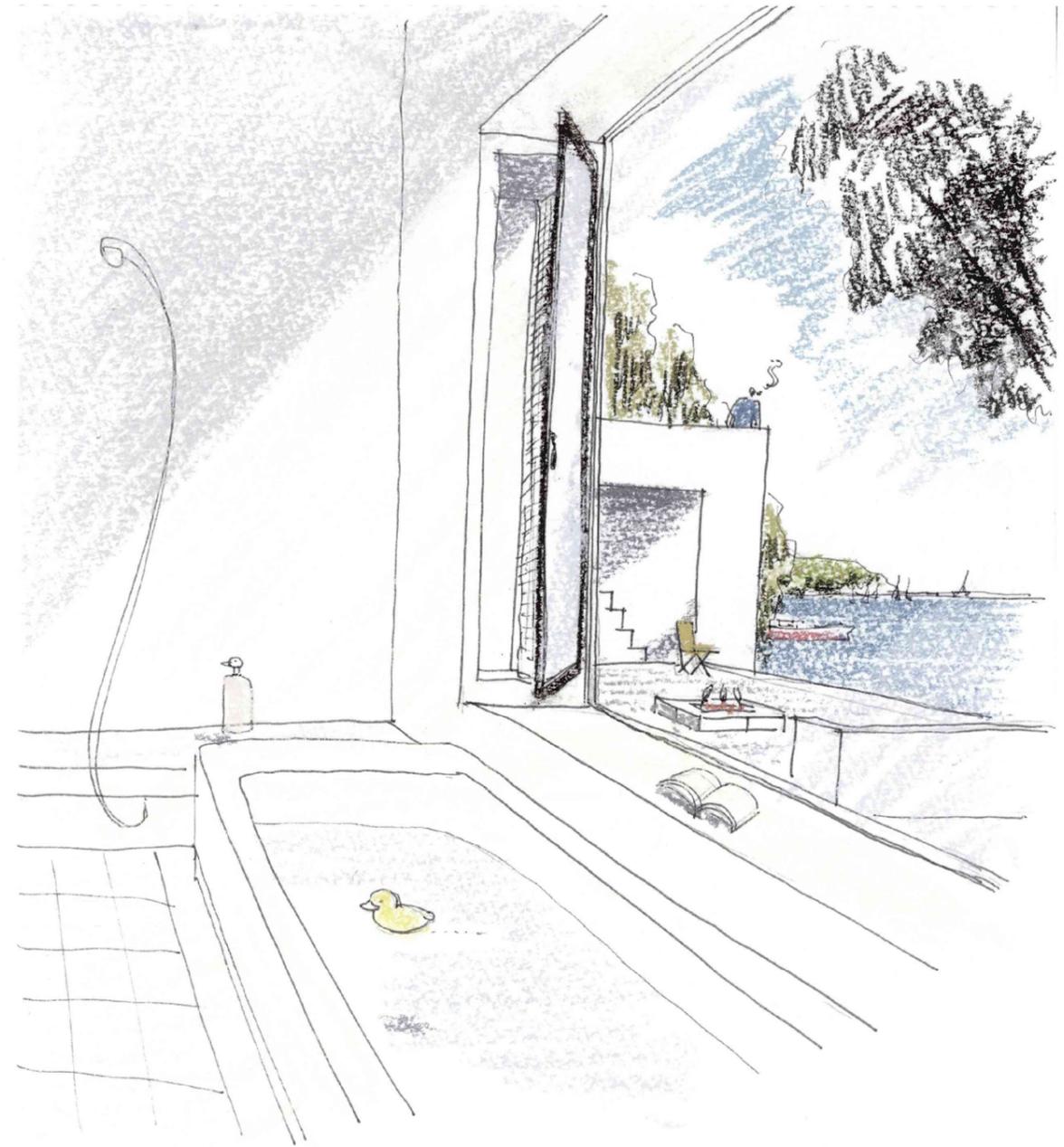
BFL

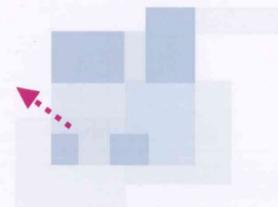


バスルーム部分平面 1/50

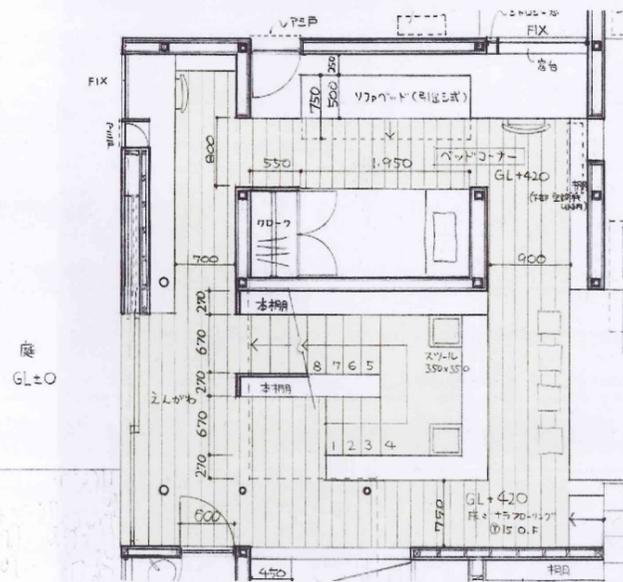
### バスルーム

アトリエの隣にあるバスルームで、仕事のあとに一風呂浴びる。  
囲炉裏にかざした鯨を見ながら。





1FL

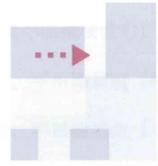


縁側・通路部分平面 1/80

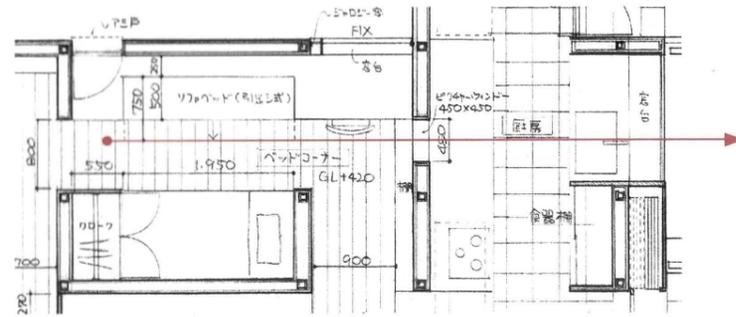
### 縁側

敷地西側の平地は最大限に残し、午後の日差しにあふれる庭をつくる。  
この縁側は各階への動線の交点にあり、細い裏道のようにになっている。





1FL



ベッドまわり詳細 1/80



### 書斎兼ベッドコーナー

机に向かうと、正面には竹林を見る大きな開口。  
側面の壁にうがたれた450×450mmのちいさなピクチャーウィンドウは、キッチンを通して海の眺めを切り取る。これは、道を曲がると建物の間から港が見える真鶴の路地のアナロジーである。単なる動線としての廊下ではなく、家の中に路地をつくりたかったのである。

手前にあるのは寝台列車にヒントを得た引き出し式のソファベッド。



第1章 (引用および写真の転載を含む)

- C・アレグザンダー著、平田翰那訳「時を越えた建設の道」鹿島出版会 1993
- C・アレグザンダー著、平田翰那訳「パタン・ランゲージ」鹿島出版会 1984
- ガストン・バシュラール著、岩村行雄訳「空間の詩学」思潮社 1969
- J・R・ヒメーネス作、長南実訳「プラテロとわたし」岩波文庫 2001
- ルイス・カーン著、前田忠直訳「ルイス・カーン建築論集」鹿島出版会 1992
- C・ノルベルグ=シュルツ著、加藤邦男訳「実存・空間・建築」鹿島出版会 1973
- F・ウィルソン著、山本学治・稲葉武司訳「構造と空間の感覚」鹿島出版会 1976
- 江國香織「泣く大人」世界文化社 2001
- 斉藤裕 (著・写真) 「ルイス・カーンの全住宅：1940 - 1974」TOTO出版 2003
- 富永譲「建築家の住宅論 富永譲」鹿島出版会 1997
- 中村好文「住宅巡礼」新潮社 2000
- 西尾実、安良岡康作校注「新訂 徒然草」1928
- 前川國男「前川國男=コスモスと方法」前川國男建築設計事務所 1985
- 村松監修「BCS建築賞作品ガイドブック」1993.11
- 湯本香樹実「ポプラの秋」新潮文庫 1997
- 「GAグローバルアーキテクチャNo.3〈MLTW/C・ムーア他〉シー・ランチ」A.D.A. EDITA Tokyo 1971
- Nicola Flora, Paolo Giardiello, Gennaro Postiglione “SIGURD REWERENTZ” Electa 2001

第2章

- 「地方港湾 真鶴港活性化整備計画(案)-参考資料-」平成17年9月 神奈川県
- 「日本歴史地名体系第一四巻 神奈川県の名」平凡社 1984

謝辞

修士設計に際して、数多くのかたがたのあたたかいご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

主査の富永譲先生にはお施主さんになっていただきました。ゼミでのご指導をはじめ、たくさんの貴重なアドバイスいただきました。副査を快く引き受けて下さり、お忙しい中貴重なアドバイスをいただいた佐々木睦朗先生、陣内秀信先生に御礼申し上げますとともに、突然押しかけてしまったことをお詫び申し上げます。

デザインスタジオの授業における、早川邦彦先生の事務所での御指導は貴重な体験でした。

また、学部のところから目をかけていただき、いつもおおらかに励ましていただいた竹内裕二先生には、建築の設計に対する姿勢を学びました。楽しんで設計すること、なによりも日々の生活を楽しむことが、建築の設計にとって一番大切なことだということを実感しています。

真鶴へ行くたびに惜しめない協力と愛情をいただいた真鶴町役場の矢野さん、岩本さん、卜部さん、多田さん、海緑島の平井さん、漁協の朝倉さん、神奈川県有加賀さん、真鶴町の皆さん、ありがとうございました。

ゼミプロである真鶴再生計画に参加できたことは、何物にも代えがたいすばらしい経験でした。岡本哲志先生には富永研・陣内研合同での真鶴・下田の調査にご同行いただき、町の読み方をはじめとてもすばらしい示唆をいただきました。陣内研究室の石渡さん、佐野君にはフィールド調査を通して町を見るさまざまな視点を教えていただきました。

ふみくんにはいつも頼りっぱなしかったけれど、楽しかったね。

今井さん、宮下君、ビギン、富田君、これからの真鶴プロジェクトをはじめ、さらなる活躍を楽しみにしています。

いつも相談に乗ってくれたJさん、佐々木研の孝司、M2のみんな、ありがとう。

ゼミ室の皆さん、お世話になりました。頼りない先輩ですみません。

忙しい時期にもかかわらず模型を手伝ってくれた富田君、ありがとう。ブラウンのオムライスは本当においしかったですね。

発表までの短い期間に徹夜までして模型を作ってくれた野村君、大場君、ありがとう。

提出前の情緒不安定な時期に支えてくれた家族に御礼申し上げます。

2008年2月 朝焼けのラジオを聴きながら

永野 尚吾